



徳島大学渭水会々報

第42号

発行/徳島大学渭水会
徳島大学総合科学部内

題字：田中 双鶴 氏



「海へ族」榎田 務 氏
↓関連記事P.12

学部長のご挨拶…… 3

総合科学部長 平井 松午

Topics…… 4

新種「シコクハコネサンショウウオ」の観察記 田村 毅

総合科学部では今(24)…… 6

四国・梶ヶ森の冬山で観測されるPM2.5の意味するもの

ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授

総合理数学科・社会創生学科 今井 昭二

特集 芸術の秋……10

野外展と歩んだ50年 佐藤 隆……10

ある個展の案内状 榎田 務……12

エンゲル・松江記念市民音楽会

～ベートーベン「ヴァイオリンとオーケストラのための協奏曲」演奏～

佐藤 義忠……13

師と吹奏楽とのあい

糸谷 安雄……14

連載④ Let's sports……16

「徳島ヴォルティス」ボランティア

体験プログラム 杉本 康博……16

連載④ 感動が人間を育てる……17

『男はつらいよ』シリーズ第17作目

「寅次郎夕焼け小焼け」

総合科学部教授 石川 榮作

連載② 研究最前線……18

総合科学優秀賞の受賞で振り返ったこと

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス

研究部 教授 小山 保夫……18

臨床心理学者が考える

「子どもが健やかに成長するために親

ができること」

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス

研究部 准教授 境 泉洋……19

スタートライン……20

新しい環境で 井上まゆ子

新生活を通して感じたこと 徳永 沙智

総合科学部で実感した世界の広がり

辻井 佑生

社会人になって 佐藤 由希

大学生生活を振り返って 清水 康夫

徳島大学での4年間を振り返って

瀧川 正之

自分の選んだ道のスタートラインに立って

安田 佑右

エッセイ……26

草創期の恩師を偲んで 山田 秀雄

地形図を読む 東明 省三

人生の不思議 大川 美和

助成事業……31

高校・特別支援学校部会総会並びに講演会

部会長 田村 公子

幼稚園部会研修報告 加藤真理子

徳島市退職校長会講演会・祝賀会

岩朝 晃男

徳大ニュース……41

総科ニュース……42

編集後記……45

地域に開かれた施設に——。

来春、地域連携大ホール(仮称)オープン



春に改修工事の終わった2号館音楽棟・美術棟に続き、この2棟をつなぐ増築工事が進んでいます。これは、新たに教育の充実及び地域連携の拠点となることを目的に、293席収容の地域連携大ホール(仮称)を2階部分に増築するというものです。大ホールは総合科学部の入学定員265名の学生が一堂に会することができるものであり、その客席は可動式で収納すれば355平方メートル(107坪)の広いフロアの多目的ホールになります。さらに、1階部分は3つの多目的室が設けられます。これらのホールや多目的室は、学内のみならず、一般への貸し出しも可能で、地域の文化拠点として活用されます。なお、竣工予定は2014年4月です。



総合科学部長
平井 松午

総合科学部に求められる人材の育成

この4月より、総合科学部長を拝命いたしました。微力ではありますが、総合科学部ならびに大学院総合科学教育部の発展に尽くしたいと思っています。何とぞ、よろしくお願い申し上げます。

渭水会会則によりますと、総合科学部の設置にともない、昭和61年（1986）4月にそれまでの「教育学部同窓会」を「徳島大学渭水会」と改称して現在に至っています。平成元年（1989）以降だけでも、学部卒業生は6,128名、大学院修了生は774名（いずれも平成24年度末現在）を数え、卒業生の皆様におかれましては全国各地において幅広い分野でご活躍のことと拝察申し上げます。

徳島大学が掲げる教育の理念は、「明日を目指す学生の多様な個性を尊重して、人間性に富む人格の形成を促す教育を行い、優れた専門的能力と、自立して未来社会の諸問題に立ち向かう、進取の気風を身につけた人材の育成」にあります。すなわち、自らの問題関心あるいは社会の諸課題に対して、自らが培った能力をもって積極的に行動できる人材の育成が、徳島大学の教育目標となっています。

昨年8月に、総合科学部が雇用先に行ったアンケート結果では、最近の学部卒業生・大学院修了生の理解能力・遂行能力はともに高く評価され、教養、社会的常識、責任感・倫理観、自主性・行動力、問題処理能力もおおむね評価されていますが、独創性・柔軟性、語学能力、国際性などについては「どちらともいえない」とする回答が50%を超えていました。他方、工学部と共同で平成23年11月に実施したアンケート結果では、徳島大学卒業生を採用して「満足」とする事業所は43.6%を数えましたが、「普通」とする回答も54.1%ありました。

これらの結果をどう受け止めればよいのでしょうか。どうも、基礎学力や社会力は高く仕事の処理能力も優れているものの、やや進取性に欠けるという一面が垣間見られるようにも思われます。最近の学生と接していると、そう感じさせられることも多いのですが、これは総合科学部の学生だけでなく、今の「大学生」に共通する特徴なのかも知れません。社会人基礎力で求められるのは「前に踏み出す力」、「チームで働く力」、「考え抜く力」とされ、大学の初年次教育やキャリア教育においてもそうした力の意味や重要性が問われています。

他方で、大学には「グローバル教育」、「社会を牽引するイノベーション創出」、「地域の人材育成」などが求められています。総合科学部でもそうした社会的要請に対応すべく、現在、本学部・大学院学生の海外交流校への派遣強化を目的としたグローバル人材育成プログラムや、フィールドワーク教育・参画型教育などの実践を通じて地域課題解決や地域活性化に寄与できる人材育成プログラムを検討しているところです。これらの取組を通じて、グローバル（Global/Local）な視点から、社会に貢献できる人材の育成に務めたいと考えています。それは、総合科学部に課せられた「地域創生総合科学」のミッション（使命）の一つと言えます。

最後になりますが、総合科学部は明治7年（1874）5月1日に設置された徳島師範期成学校を母体としていて、平成26年（2014）には創設140周年を迎えることとなります。さらに来年は、昭和24年（1949）5月31日に徳島大学学芸学部が発足して65周年、平成6年（1994）4月1日に大学院人間・自然環境研究科（現・大学院総合科学教育部）が設置されて20周年という節目を迎えます。

来年（平成26年）3月には、現在建設中の地域連携大ホール（仮称）が竣工予定で、大ホール竣工ならびに2号館改修記念式典の開催を予定しています。併せて、この機会に徳島師範期成学校創設140周年記念事業も行いたいと思っていますので、渭水会会員の皆様にはぜひご出席賜れば幸いです。

Topics

新種「シコクハコネサンショウウオ」の 観 察 記

田村 毅



ハコネサンショウウオを初めて手にしたのは、昭和46年の夏である。一字中学校の生徒が大剣谷の溪流から、朱色をしたウナギの様なものを岩塊の上に放り上げた。その時の生徒のすばやさと、20cm位の奇妙な色をした動物を見た時の興奮は忘れられない。このサンショウウオこそ、この度、新種として認められた「シコクハコネサンショウウオ」であり、忘れられないサンショウウオとなった。42年前の事である。

生きた化石といわれるサンショウウオは、四国山脈の標高1400m位の原生林の渓谷に3種類が生息している。どの種類も隠棲的で、個体数も少なく、発見の時期と場所がわかりにくい。その中の1種のハコネサンショウウオは、関東を中心に本州と四国に生息しており、絶滅危惧種で、特に生態把握が難しい。多忙で調査が空白であった時もあるが、昭和60年代になり研修センター生物室勤務時に、調査も研究も出来、サンショウウオ研究は前進した。ハコネサンショウウオには、生息谷でも、運がよければ1匹に出会う位が普通であるのに、一字中学校の保護者の方が親切に、ハコネサンショウウオが多く生息している深山の渓谷を教えてくれた。ハコネサンショウウオの生態研究ができ、卵を発見し、新種である事が確定できたのは、この渓谷を案内して下さ

ったお蔭である。

以来、矢筈山（1848m）を源流とする霧谷川上流の黒笠山（1703m）の谷が調査場所となった。公職を退職し自由の身になってからは、春が楽しみになった。ただ、何分にも渓谷が山奥であるので、台風が来る度によく山崩れや林道崩落があり、中断せざるをえなかった。林道で出会った人から「消防団召集がかからんようにしてよ」と本気で注意をしてくれたが、不安はあったが、何時も心の中に、夢や希望の様なものがあつた。山道は苦しいが、谷へ入れば、必ず、何か嬉しい発見があり、20回、30回と足を運ぶうちに、ハコネサンショウウオの生態や生息環境が、段々とわかるようになってきた。

平成23年、NHK 徳島の佐々木彩アナウンサーの紹介で京都大学の吉川夏彦先生との交流が始まった。そして、国内でもハコネサンショウウオの卵の発見は僅か3例しかなく、四国では昭和12年に広島大学の佐藤博士が石鎚山で発見しただけである等、卵発見の難しさを知り、個体数が多く生息している黒笠山渓谷では、卵は必ず見つかるという自信が湧いてきた。いろいろ考えた末、吉川先生をはじめ教え子や家族の支援、協力をお願いし、入梅前の6月上旬、調査を実施した。朝の6時に自宅を出発、渓谷到着は12時過ぎである。今までの試行錯誤の調査

で、産卵場所を追い詰めていたので、数メートルの間を集中して調べた。数時間後、みんなの努力で、遂に、伏流水の奥深くで卵嚢発見に成功したのである。手にした3本の卵嚢は正真正銘、追いつけてきたハコネサンショウウオの卵であった。長年の夢が実り感動と感謝の気持ちが湧いてきた。四国内で75年間も見つからなかった理由や豪雨増水時の激流でも影響を受けない安全な伏流水の奥で産卵する種族を守る素晴らしい習性や、何故黒笠山の溪谷だけに数多く生息しているのか等の謎も解けた。

卵を発見してからは教え子の、あたたかい献身的な援助と家族の協力で支えられ、毎回、弾む気持ちで深山幽谷に登り、嬉しい観察が続いた。そして、謎であった産卵生態、孵化時期、孵化の方法、幼生の前後肢の生長、腹卵黄の消長、幼生期間等々、ハコネサンショウウオの生活史に関する新しい情報を次々と明らかにする事ができた。

剣山系のハコネサンショウウオは、四国が本州から離れ、島として誕生した第四紀の洪積世（氷河時代）からの長い地質時代の中に、四国山地の自然環境に適応した形質に変異したのであろう。関東周辺に生息するハコネサンショウウオとは異なる遺伝子や形態や固有の生態を持つ新種「シコクハコネサン

ショウウオ」となったのである。こつこつと積み重ねてきた生態調査と卵の発見で、新種確定の根拠となる生態を明らかにする事ができ、動物学に少しでも貢献できた事は最高に幸運である。

サンショウウオ調査は、厳しい自然を生きる野性動物の習性や人には、思いやりのある美しい心や夢や希望を持つ事、互いに協力し合う事が、いかに大きな力になるか等、人生にとって大切な事を沢山教えてくれた。シコクハコネサンショウウオとサンショウウオが棲む自然は、県民の宝であると思う。

(昭和31年中学校課程生物教室卒)



シコクハコネサンショウウオの卵（卵のう）H24. 6. 10



ハコネサンショウウオの成体（♂）

四国・梶ヶ森の冬山で観測される PM2.5の意味するもの

ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部教授
総合理数学科・社会創生学科 今井 昭二



少年時代、「公害」という言葉が書かれた立て看板を横目に魚釣りをしていたものです。オキシダントや光化学スモッグが子供から高齢者までなじみ深かったあのころ、環境化学への志に突き動かされていました。公害対策の技術の進歩、排ガス規制の進んだ先進的な自動車の登場、黒い煙突の煙はいつしか白く、都市の中心街の電光掲示板の存在も忘れ去られてしまいました。

文部科学省の現代GPプログラムが採択され吉野川流域における共生環境教育への取り組みが総合科学部において始まりました。初冬の車窓から「梶が森天文台」の標識が目に見え始めたとき、小学校地図に県内のスキー場を見つけたときの古い昔の記憶に突き動かされました。ナノ粒子の金クラスターや活性炭のナノスペース相互作用など数式と数値ばかりみつめ黒鉛炉原子吸光分析法の理論研究の日々において「酸性雪の現状は」、「眺望している山

系は病んでいないか」また「四国の水源の森は」など雪国での経験と研究の記憶が蘇りました。

日本海を中心に環日本海では大気汚染物質の日本への長距離輸送による越境飛来が研究されていました。標高1000mを超える冬山での調査も「日本の名山」で実施されていましたが、冬山登山の深い雪という過酷な条件で研究者による精密な試料採取の離れ技は研究の発展を拒むのに十分すぎました。約20年前、上杉謙信の里、春日山城近くで教員を目指す学生を指導して流行りの酸性雪の研究をしていたとき、ピーカーの中の雪解け水に浮いていた粘土鉱物と少しばかりの黒いススが印象的でした。はじめての“かんじき”、4mを超す積雪に埋もれた家屋、雪を踏みぬいて枯れ水路に落下した雪原でのサンプリング。思い起こせば、その頃既に始まっていたのです。

研究フィールドは剣山系夫婦池、塩塚高原、野鹿池山と梶が森、なかでも高知県大豊町「梶ヶ森」標高1400mの山頂では、(図1、2) 純白の雪景色、



図1 梶ヶ森山頂の冬景色



図2 吉野川沿い谷の雲海



図3 樹氷

(図3) あこがれとロマンの樹氷、釧路平原では春の数日だけ出現する(図4、5)「雨水(うひょう)」により枯れた木々はガラスの森に、極寒の早朝にしか現れないダイヤモンドダストとサンピラー現象など「四国の北海道」がそこにあります。最近では、新雪採取器、樹氷専用ネット、手製の降雨採取器など調査観測は手作り感満載で行っています。

冬期降水をもたらす大気は、気象データベースを用いた国立環境研究所のCGER-METEXによる流跡線解析からバイカル湖・北京・朝鮮半島付近、ロシアウラジオストック・日本海・近畿地方、および中国武漢・上海・東シナ海・九州北部の三流入経路に大別できることを解明しました。樹氷、降雪および降雨中の大気汚染物質濃度において上海ルート経由の冬期降雨中の高いカドミウム濃度、北京ルート経由の降雪中の高い鉛濃度、ロシアルートでは経由



図4 徳島新聞2012 3掲載の雨水

する近畿上空での大気汚染物質の供給量が少ないなどの特徴を突き止めました。樹氷中や降雪中の鉛濃度は、最高で水道水の許容限界の2倍量も検出されることもありました。日本国内では火力発電所などは天然ガス発電へ移行し、数少ない従来型石炭ボイラーでも公害対策が施されています。未処理の場合、石油、軽油やガソリンでは酸性化合物である二酸化硫黄などの大量発生や石炭ボイラーではそれに加え鉛やヒ素などの有害重金属も大気中に放出されます。

折も折、研究が6度目の冬になる平成25年、北京の淀んだ大気と汚染の現状が報道され、九州福岡への霞む程の大気汚染物質の流入が話題に上りました。経済成長めざましい中国をはじめ東アジアの影響からか西日本の微小粒子状物質PM2.5による越境汚染が原因でした。私たちが梶ヶ森山頂から阿波池田方面を望むと国見山山頂付近までの低い位置に（図6）黒い大気汚染の現状が目視できていました。いつもは梶ヶ森山頂の雪や樹氷の濾過物の電子顕微鏡観察とエネルギー分散型X線分析法で分析を行っていますが、その測定試料の中で（図7）特別に黒いススを含む焦げ茶色の濾過物が樹氷から発

見されました。話題になったPM2.5は、微小なスス（炭素微粒子）、多環芳香族化合物や（図8）フライアッシュのように直接発生する一次粒子と大気中での化学反応によって二次的に生成した硫酸塩や硝酸塩のエアロゾルのような二次粒子を含みます。0.1 μm 以下の粒子の輸送距離は数十kmですが、無機塩のエアロゾルを含む0.1–1 μm の粒子は数百～数千km輸送されます。北京や武漢は2000km圏内です。冬期には北西季節風をもたらす極前線ジェット気流の影響と言われ、春期や温暖な冬にはヒマラヤ山脈を経由してくる亜熱帯ジェット気流（偏西風）の影響により上海方面からも輸送されて来るようです。PM2.5には、電子顕微鏡で観察しても住所氏名郵便番号が記入されている訳ではないので持ち主がはっきりとしません。しかし、その中身をこっそりのぞき見るとバナジウム、亜鉛、クロム、ニッケルなど発生源に直結した暗号のような情報が解読できはじめています。

この現状や観測例が、地元徳島新聞の第1面に掲載されると、テレビ朝日ニュースステーションをはじめ読売テレビ・日テレ、毎日放送など主要民放の報道番組で全国放映され、読売新聞や朝日新聞にも



図5 雨氷ガラスの森



図6 国見山を望む大気汚染の現状

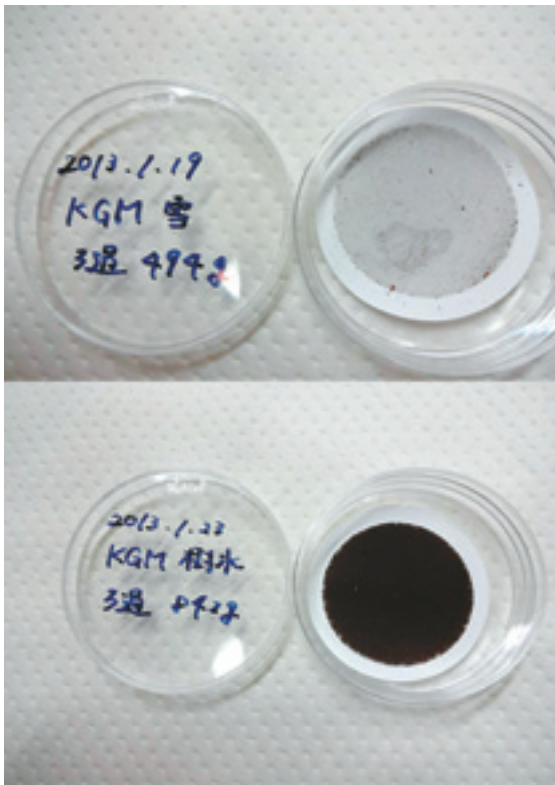


図7 大量のススを含む樹水の濾過物

掲載されました。中国で旧正月を祝う春節の休暇中に流入した大気では樹水の濾過物は随分白くきれいでした。その後4日間は安定した冬型の気圧配置が維持され同一方向から大気の流入が続き樹水に黒い固まりが観測されたことから長距離輸送の説明しやすい証拠が見つかったと考えています。これらの一連の報道は、日中韓による共同対策へと政府間交渉を後押しする世論の形成に大きく寄与しました。四国の山村のローカルな冬景色が東アジアの越境大気汚染のグローバル課題に直結するグローバルな教育研究が展開され、社会貢献と学術研究が一体化された地域科学を目指す本大学院の発展にも貢献できることが期待されます。「公害」とは加害者が明確なときであり、「環境問題」は加害者が特定しにくいときに用いると聞きます。現代は「環境問題」が主流で、本部局の教育研究もグローバルな時代に先鞭をつけるものと確信しています。

最後に、現代GP教育プログラムから続く三年生や大学院生対象の(図9)吉野川流域圏実習の「梶ヶ森野外調査実習」では多くの学生が水質調査、水生

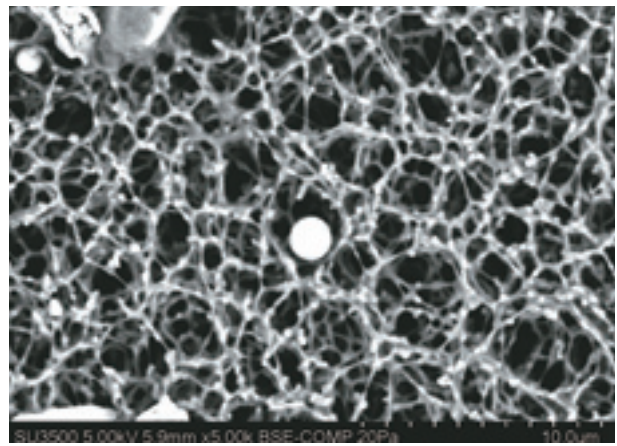


図8 梶ヶ森の樹氷中のPM2.5フライアッシュ電子顕微鏡写真(5000倍) 日立ハイテック撮影

生物調査、植物資源調査、天体観測をはじめ山頂自然公園清掃ボランティア、また、一年生には祖谷溪や剣山周辺での実習を通して貴重な体験実習により徳島の宝「吉野川流域圏」を思いやる心が育まれています。学部改組によって今では総合理数学科と社会創生学科の二学科、および大学院環境共生分野と基盤理系分野の二分野で授業から卒業・修士・博士研究まで担当しており新研究部体制も落ち着きを取り戻そうとしています。学内組織ソシオグリーンフロント・プロジェクトによる徳島大学パイロット事業支援特色研究プロジェクト研究「四国源流における水と緑のグリーン・イノベーション」や学部の重点研究「四国・徳島の自然環境及び生物資源の保全と活用」、また、文部科学省の気候変動適応研究推進プログラム(RECCA)の一員として活躍することも一緒に研究した卒業生・修了生のご支援の賜だと感謝しています。



図9 山頂での実習風景

野外展と歩んだ50年

徳島彫刻集団代表 佐藤 隆

徳島大学美術教室で彫刻を学び、制作活動をしてきた卒業生の有志14名が坂東文夫先生のもとに集まり、徳島彫刻集団を結成したのは、1962年であった。坂東先生は、彫刻を野外に解放し、それまでのサロン芸術ではなく、自然や環境の中で、彫刻を大きく羽ばたかせようと主張した。それに呼応するメンバーが徳島彫刻集団である。当時、宇部市で開催されていた野外彫刻展は全国でも注目を浴び、我々にとって最も大きな刺激であった。

結成後の徳島彫刻展は、制作場所や、会員が県外の教員となって転出による入れ替わりなど問題もあったが、リヤカーで作品を運んでいた当時が懐かしい。今年で51回目となった。野外彫刻展を毎年楽しみにしている熱心な愛好家も大勢あり、開催時期の問い合わせや作品に対するコメントを求める見学者

もいる。初期のころは作品が壊されたり、野外に置くことへの反対意見も聞こえたものだが、今では野外彫刻展が一般市民と深い関わりを持つようになっている。数年前から彫刻に関心のある人々に対して、作品鑑賞会を行ったり、土・日曜日などに会員が現場で作品を説明することにも取り組んでいる。2007年の徳島での国民文化祭においては、全国公募の野外彫刻展に併設して第45回を開催し県内外からの客に見ていただいたことも、会員の志気が上がり相乗効果も大きかった。ある年には、会場での彫刻作品と環境を交えた写真撮影会や写生大会、モダンダンスとのコラボレーションなども彫刻に対する意識を深めてもらう点で役割を果たした。2年前からは県内の小学生を対象としたワークショップを行っている。次世代育成という見地からも集団の役目で



「鳴門」(1992年 鳴門運動公園)

こどものためのワークショップ
「土風鈴をつくらう」



あるとの意見が高まっているからだ。今年は、粘土を使ってテラコッタにした土風鈴作りを行った。子どもたちには楽しい行事となった。多少なりとも彫刻に関心を以てもらえたに違いない。さらに徳島中央公園を利用する野外展では、徳島市の公園緑地課の職員の方々の絶大な協力にも支えられ運営されており、心から感謝しなければならない。

徳島彫刻集団は、個々の活動はもちろんのこと、集団としての活動をこれまで数多く手がけてきた。その成果は、日頃の野外展での彫刻と環境をテーマとした実践が大きな種となっている。

実例として幾つか挙げてみる。新町橋たもとの公園に「野上彰の碑」を制作したのが1970年。当時としては珍しい前衛感覚の形でステンレスを使った。高さが10mもあり街中のビルに囲まれた空間にうまくおさまっている。この作品の揮毫が川端康成によることも作品を際立てた。1985年の牟岐少年自然の家「イルカの群像」は、徳島県から文化のための1%事業として、徳島彫刻集団に依頼を受けたも



徳島の秋の風物詩ともなっている野外彫刻展。左端が著者

のだ。さらに1992年に県立鳴門運動公園に建設した48国体の記念モニュメントは、巨大な石組をして数年かけて完成させた大きなプロジェクトであった。これらの制作にあたっては、集団メンバーのそれぞれの意見を交え時間をかけて煮詰めたため、悪戦苦闘の連続であった。そのつど坂東代表的確なアドバイスを受けたことがなつかしい。

一方、制作活動以外においては、さまざまな研修活動に参加した。1999年と2000年県の応援を得て日本海と太平洋を結ぶ島根・鳥取・岡山・香川・徳島・高知と徳島市・米子市の参加協力のもと第1回西日本彫刻文化交流サミットを2000年と2回続けて開催できたのも、意義深い事であった。他にも、本四架橋の完成の後には、兵庫や淡路島の作家との交流が続いていることは心強い限りである。

今日まで歩んできた51年を顧みて会員の若返りと、設置された彫刻は環境や空間が変化し、長年の経過からメンテナンスが必要であると考えられる。彫刻は常に最良の状態にとどめて置くことが大事だ。今後はこのことも大きな課題となってくるだろう。これからは広く県民に彫刻文化を伝えるための「移動展」も推進したい。多くの県民に親しまれる息の長い野外展として続けなければならない。そのことを坂東先生の教えとして受け止めたい。

(昭和32年小学校課程美術教室卒)



「野上彰の碑」(1970年 新町橋たもと)

ある個展の案内状

柘 田 務

書類の整理をしていると一通の個展の案内状がでてきました。

個展の主は、高校の美術で関わったN君です。文面が面白かったので、「文化の森通信システム」に拙文とともに紹介した経緯があります。もう20年にもなります。

「それからは誰もやって来ない。」

今、案内状を手にして、このフレーズに、結構、鮮度を感じます。

案内状は、ある物語よりと題して、次のように綴られています。

- ・「耳、耳だけが(キリスト教徒)の器官である。」
／M・ルター
- ・ルネサンスの(五感の階層秩序)の中で聴覚と視覚が逆転し、視覚が優位に立った。見ること、見通すこと、「知は力なり。」／F・ベーコン
- ・「そこへセザンヌがやってきた。彼の描く風景は、その視覚性の痕跡を殆ど失っている。樹木はあのように目に見えるものではない。あれは人が目を閉じたまま出会い感じられる樹木の姿なのである。」／R・G・コリングウッド
- ・そこへデュシャンが現れて自照的観念の時限装置を仕掛けた。
- ・それからは誰もやって来ない。やってきたのはメディアの自己増殖である。「人間はついに波打ち際の砂の衰状のように消滅するであろう。」／M・フォーコー

先賢のことばの断片をつないで美術の現在位置と自らを量っています。

「それからは誰もやって来ない。」

この言葉に、彼の制作への強い意欲と自負が感じ

られました。

彼は、海部刀の海部氏吉の末裔で、芸大に進み、現在、芸大の教壇に立っています。彼の作品は、ベルギーなどいくつかの美術館に収蔵されているとのこと。

西洋美術は美術の外部社会の流行、パラダイムの影響で新しい展開を図ってきました。

「ロマン主義は遅れて来たフランス革命、クールベのリアリズムはスナップ写真のような対象、印象派は光学理論の影響、ピカソは西洋の外部世界が西洋と対等になった時代に出現、抽象絵画は自然科学の純粋化と平行し、ミニマムアートは還元主義、シュールレアリズムは深層心理学から、ウォーホールはマスプロ化された自然の発見…」と彼は断じます。そして、「この変化のスタンスは30年ぐらいが適当かな。」などと言っています。更に、

「現在の日本の先端を行く現代美術はこのパラダイムを理解しようとして進められているが、これがやはり西洋のモデルの後追いを抜けきれないところがある。日本は逆輸入のかたちでしか新しい作家(作品)を認めない傾向がある。」とも。

発明の美術は、終焉を迎えたのでしょうか。世紀の巨匠パブロ・ピカソの没後40年、依然としてこれまでのメニューによる自己増殖に終始しているようです。

「それからは誰もやって来ない」「波打ち際の砂の衰状のように消滅するであろう。」といった言葉が妙に生々しく感じられてきます。美術の秋、束の間の雑感です。

(平成25年9月)

(昭和32年中学校課程美術教室卒)



エンゲル・松江記念市民音楽会

～ベートーベン「ヴァイオリンとオーケストラのための協奏曲」演奏～

第4回生 佐藤 義 忠

大正3年(1914)第一次世界大戦時、青島で日本兵と戦って敗れたドイツ兵俘虜206名が、徳島俘虜収容所(現県庁の旧議会議事堂)に収容されてきました。その中にハンゼンがいて、ドイツ兵を集めて指導しオーケストラをつくります。初め3個のヴァイオリンと一枚のメモ用紙に書かれた楽譜から出発し練習を重ね見事な徳島交響楽団(後板東で第九を初演)に育成します。板東へ移転するまでの2年半に、美しく青きドナウ、フィガロの結婚、ローエングリーン、カルメン等500に及ぶ楽曲を演奏しました。

これを聞いていた徳島の青年(徳島師範学校教諭や卒業生を含む)は、板東の松江所長を訪ね、ドイツ兵に西洋音楽の演奏法を指導してもらえないかと懇願します。松江所長はエンゲルを呼んで頼んでくれます。初めは板東のへんろ宿でやがて徳島の立木写真館へ来て、手取り足取りの熱心な指導をしてくれます。

こうして演奏ができるようになったのが「美しき天然やドナウ川のさざ波・第九歓喜の歌」などです。このようにして徳島の青年達は民間で日本最初の「徳島エンゲル・オーケストラ」を作り演奏活動を進めました。

このような徳島で展開された貴重な活動を顕彰し現代に活かそうと「エンゲル楽団・合唱団」を編成し、エンゲル・松江記念音楽会を2000年から行ってきました。演奏曲は歴史的事実に基づく楽曲ばかりです。



徳島エンゲル・オーケストラ(於 立木写真館)

今年、ベートーベンの日本初演の「ヴァイオリンとオーケストラのための協奏曲」を記念するため、徳島大学交響楽団とエンゲル楽団の共演と世界で活躍したヴァイオリニスト奥村智洋氏をお迎えし、2013年7月23日徳島県郷土文化会館で満員の聴衆を迎え岡山茂行氏指揮で歴史的再演ができました。

大正時代にドイツ兵から西洋音楽を取り入れた徳島の音楽史を末永く伝えていきたいものです。

(昭和33年中学校課程史学教室卒)



エンゲル・松江記念市民音楽祭



師と吹奏楽とのあい

糸谷 安雄



田舎育ちで才能豊かとはいえない私が音楽教師を天職として、また音楽に関わる多くの仕事を体験することができたのは、阿波高校や徳島大学の先輩、先生方のお陰である。

阿波高校では、当時珍しいオーケストラ編成の音楽部があり、その美しい音色が私の生涯の道を決めたといっても過言ではない。二人の先生にお世話になったが音楽部顧問の川人先生からは合奏の楽しさを、出口先生からはソルフェージュやピアノの基本を教わった。

徳島大学音楽部に入学しても近藤哲司郎先生をはじめ、多くの先生方に出会った。

とりわけ吉森章夫先生には夏休みなど長期休業日に泊まりがけの指導を頂き、主に指揮方法を中心に指導を受けることができた。お陰で当時活躍していた男声合唱団（リーダークライス）を指揮する機会を得た。繊細な表現が求められる合唱団の指揮を経験したことで教師となってから大変役に立つことになり、吉森先生には今でも感謝している。

出足は遅かったが良い音楽環境と良き先生方に恵まれ、教師となって6年目（昭和44年）に徳島市富田中学校に赴任し、そこで初めて吹奏楽にであった。

指導されている撫養光男先生は当時すでに全国的にご高名で、その指導ぶりを間近で見させていただくことができたことは何にも変えがたい経験であった。常に妥協を許さず、徹底的に音楽を作り上げていくその姿に感動を覚えたものであった。

その後、私が富田中学校吹奏楽部の指導に携わることになったが、試行錯誤の連続であった。このたびせっかく投稿の機会をいただいたので、現在活躍中の先生方にとっては釈迦に説法ではあるが、長年吹奏楽に関わって来た者として幾つか思いを述べてみたい。

一つは私たち音楽教師が部活を運営することで必要なのは環境づくりである。教員は何の部であれ、部活指導が第一義ではなく、学校という組織の中の一員として学級担任や学年の仕事、学校行事を十分に果たしたうえで部活指導に当たらなければならない。校内や校外の行事が多い上、楽器の補充、修理費など経済的にも大変なことから、人的、物的な環境を整えることが重要で、管理職をはじめすべての教職員の理解と支援を得ることが大切となる。

次に学校現場は社会の流れとともに変化し、昔のように長時間練習に明け暮れた時代ではなくなった今、短時間で効果を挙げる指導法についても工夫をしなければならない。

また、テレビ番組で全国レベルの吹奏楽の練習風景がよく紹介されるようになり、その影響で部員も増加傾向にある。吹奏楽は楽器の種類も多いことから教師一人が部員全員をそれぞれ指導し切れないのが実情である。そこで、私はパートリーダーを中心にロングトーンで音作りを、個人やパートで演奏技能を高める練習パターンを習慣づけ、主体的に取り組む組織作りを徹底させた。また、保護者や吹奏楽部の先輩方とは常に連絡を取り合い協力をお願いし



S50年度全日本吹奏楽コンクール秋田大会で金賞を受賞した富田中学校の演奏の様子（指揮は糸谷）

たが、このことは部員を安心させると共に部員のモチベーションの向上、引いては生徒指導の一環にもなり得るからである。

終わりに指揮についても考えてみたい。指揮者は曲の構成を踏まえた上で、作曲者の意図を理解し、自分なりの解釈と信念を持って表現するものだと思う。

指揮者はそれぞれの小節やフレーズを音色や音程、ハーモニーを考え、生徒により良い表現と演奏技能の向上を促しながら、作り上げていく職人のような気がする。

そのために私は思いついた事柄をスコアにどんどん書き入れていく。良いアイデアもすぐに忘れてしまうからである。棒の振り方も丸や三角、四拍子の四角の矢印で書き入れたり、特に意味を持たせたい

大事なフレーズの前拍の振りには「落ち着いて」とか「大きくうねりを持たせて」などを書いたりする。

指揮譜に書かれた音楽をよく研究している先生の指揮は美しいものである。美しい音楽表現のために感性豊かな職人であって欲しいと考えている。

ところで最近は吹奏楽の指導は音楽を専門にする教師だけではなく、他教科の先生も全国吹奏楽コンクール等で良い成績を上げている。指導には特に高度な演奏技能がなくても自分なりの信念を持ち、音楽への情熱があればそれで十分である。吹奏楽界の指導者も少しずつ世代交代しているが、若い先生方はこれまで通り自信を持って頑張ってもらいたい。

時代遅れで当たり前すぎることもかもしれないが、何かひとつでも参考になればと思う。

(昭和39年中学校課程音楽教室卒)



第24回全日本吹奏楽コンクール神奈川大会にて

Let's sports

体や健康、スポーツに関する話題を
シリーズでお届けします

Vol. 4

「徳島ヴォルティス」ボランティア体験プログラム

徳島大学総合科学部人間文化学科心理・健康コース 3年

杉本 康博

徳島大学総合科学部では、最近、学生(サークル)や教員(ゼミ)による学外での活動(社会貢献活動)が盛んに行われるようになってきました。私は、この度、スポーツ経営学研究室(行實先生)と徳島ヴォルティス(J2プロサッカーチーム)が企画したボランティア体験プログラムに参加しました。このプログラムは、3部構成となっており、スポーツを通じた街づくりを目指す徳島ヴォルティスの運営について学び、その運営体験だけでなく、最後は、自分たちで1つの企画を考え、それを運営するプログラム内容でした。基本スタイルは、「事前説明会⇒当日業務⇒試合観戦」といった流れでしたが、具体的には、第1回目(ホップ)は、事前説明会において、徳島ヴォルティスというチームを知ることと、毎試合の様々な企画について学ぶことができました。また、当日は14名が参加し、入場口のチケット確認や総合案内といった、スタジアム内での業務を体験することができました。第2回目(ステップ)は、事前説明会において、接客について学び考え、当日は、14名が参加し、お土産やフェイスペイントのブース、チケット販売といった、スタジアム外(ボールパーク)の業務を行いました。そして、第3回目(ジャンプ)は、ボールパークでの徳島大学ブースを出店することとなりました。大学で行った企画立案会議では、これまでの活動を振り返り、どのようなサービスをすれば、お客様(観戦者)に喜んでもらえるのかについて皆で話し合いました。そして、皆で分担し、準備をしました。当日、徳島大学のブースは、フェイスペイント、写真撮影、お面、ミニ旗、ペットボトルメガホンのブースを出すこととなりました。また、当日は、過去最多の18名のボランティアスタッフ(学生)が団結し、スタジアムを盛り上げ

ることに一生懸命努力しました。

以上のような3回の活動でしたが、中でも、特に印象に残っているエピソードとしては、第3回目の活動時の事でした。私は、1組の素敵な親子に出会いました。その親子は、現在、父親の仕事の関係でフィリピンに住んでいる日本人親子でした。私は、その母親と徳島ヴォルティスについてのお話をすることができました。その母親によると、フィリピンで徳島ヴォルティスの試合を見に行くことを話すと、周りの人から面白がられたのだそうです(たぶん、馬鹿にされたのではないかと思います)。そんな話を聞いて、徳島ヴォルティスはもっと世界に目を向ける(情報発信をする)必要があると思いました。世界から徳島を見ることで、新しい発見やサービスの在り方があるのではないかと感じたからです。徳島ヴォルティスが選手だけでなく、その周りを取り巻く人々にも、世界から注目されることでより魅力的なチームになるのではないのでしょうか。

私は、徳島ヴォルティスのボランティアを通じて、貴重な体験をすることができました。大学生活では接する機会の少ない地域の方々との触れ合い



活動後のミーティングにて



徳島大学ブースでフェイスペイントの案内をする学生



徳島大学ブースで作成した応援グッズを配る学生

や、お客様が喜ぶサービスとは何かについて考え、学ぶことができました。海外に住んでいる親子に出会うこともできました。私は、また来年も徳島ヴォルティスのボランティアをしたいと思っています。そして、たくさんの人と出会う中で、自分を成長させていきたいです。今回、このようなボランティア活動をするにあたり、徳島ヴォルティス事業部（中村様、山下様）、行實先生には大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。最後に、皆さん、私たちと一緒にこのような、ボランティア活動を試みませんか？そして、人とのめぐり会いの中で、自分を成長させていきませんか。



ボランティア活動後の試合観戦

連載④

『男はつらいよ』シリーズ第17作目 「寅次郎夕焼け小焼け」



総合科学部教授 石川 榮 作

前回までは故郷高知県で体験した感動を綴ってきましたが、私は高校を卒業すると同時にいわば「土佐藩を脱藩」して、九州の大学に進学しました。そこで8年間の学生生活を送り、生涯のテーマとなるニーベルンゲン伝説とトリスタン伝説に出会いましたが、もう一つ忘れてならないのが寅さん映画との出会いです。特に大学院時代は希望と挫折の狭間でドイツ文学の研究に励んだ修業時代でもありましたが、苦しいときの唯一の気晴らしが『男はつらいよ』の寅さんシリーズでした。勉学に行き詰ったときなど、寅さん映画を見て何度勇気づけられたことでしょう。それ以来、私は寅さんファンで、劇場とビデオ・DVDでの鑑賞を含めると、これまで400回は観ていることになります。

48作まで続いた寅さん映画の中でも、特に感動し、忘れられないのがシリーズ第17作目「寅次郎夕焼け小焼け」（昭和51年）です。上野の焼鳥屋で知り合った貧しい身なりの老人が、実は日本画壇の重鎮と評価される池ノ内青観（宇野重吉）で、その後、寅さん（渥美清）は播州竜野でその青観先生と再会すると同時に、きつぷのいい芸者ぼたん（太地喜和子）とも知り合いになるという内容です。この映画の見どころは、その青観先生の故郷竜野の町で、青

観が昔の恋人お志乃さん（岡田嘉子）を訪ねる場面です。その直前には「夕焼け小焼け」（赤とんぼ）のメロディも流れて、昔の故郷を思い起こさせる雰囲気です。お志乃さんは生け花の師匠をしながらも、この静かな町で独り暮らしを続けています。青観はお志乃さんの人生に責任があると言い出して、自分は後悔していることを告白します。そのときお志乃さんはこう答えるのです。「私、近頃よくこう思うの、人生には後悔はつきものじゃないかしらと。ああすればよかったという後悔と、もう一つはどうしてあんなことをしてしまったんだろうという後悔・・・」さまざまな出来事でいっぱい苦しい人生をそれまで歩んできた女優岡田嘉子だけに、ジーンとくる台詞です。私はすっかり感動してしまいました。「後悔を恐れて何もしないことは、何もできないで後悔することよりもっと恐ろしいことだ」と勇気づけられました。これは私の生活信条の一つにもなっています。この映画の最終場面で、多額のお金を悪い人に騙し取られた芸者ぼたんに青観先生が「絵画」を贈る場面も私たちに大きな感動を与え、まことにすばらしい映画だと思います。寅さん映画から受けた感動は、私の成長にとってなくてはならないものとなっています。

総合科学優秀賞の受賞で振り返ったこと

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 教授
小山保夫

総合科学優秀賞をいただきました。対象の研究業績は、私にとって百八十三～百八十五編目の原著論文で特別なものではありません。二十数年前に徳島大学総合科学部に東北大学大学院医学研究科から赴任して以来、大学教員の仕事として続けてきた「実験して論文を書く」という作業のほんの一部です。この間、総合科学科、自然システム学科、社会創生学科と学科名は変わりました。しかし、仕事は細胞レベルで化学物質（環境汚染物質など）の作用・影響を解析し続けています。これは総合科学部で始めた仕事です。赴任して二ヶ月目、林弘三先生（名誉教授）から「小山さんなら、解るでしょう」と渡された論文が、東北大学時代までの約十年間の研究を捨てさせました。その論文で用いられていたのは蛍光プローブ（2008年のノーベル化学賞の実験技術）でした。当時、私は細胞膜電圧固定法（1963年と1991年のノーベル医学・生理学賞の実験技術）を用いて五十編程度の論文を国際誌に既に出しており、実験機器も東北大学から移管して研究ができる状況にありました。渡された「一編の論文」でそれまでの実験を捨ててしまいました。蛍光プローブを用いる新しい実験を始めると、富吉富貴代先生（名誉教授）が研究室の卒業研究の学生さん（現・大鵬薬品工業）を譲ってくれました。実験に関連する測定機器フローサイトメータを操作できる（操作できるように指導を受けた）学生さんでした。学生さんの卒業研究は在学中に彼女を筆頭著者として国際誌に論文として掲載されました。彼女は卒業研究をベースとして薬学博士学位を取得しました。国際誌に論文がコンスタントに出せることで、研究室の学生さんの多くが旧帝大の大学院に進学しました。また、医学部・歯学部にも編入学し、既に五名が医師・歯科医師として臨床の場にいます。さらに、全国レベルで学術賞を何人かの学生さんが受賞しました。優秀賞受賞の対象の研究も含めて、始まりは「一編の論文」

です。そして、ここで百編以上の論文が出せたのは、実験に参加した学生・教員の皆さんの尽力で深く感謝しています。

さて、受賞対象となった研究業績の内容です。ビオレのようなハンド・ソープのラベルに書かれている成分表をご覧ください。「トリクロサン」という抗菌剤が含まれています。トリクロサンを含めて各種抗菌剤は世界のどこの都市河川からも検出されています。山本裕史先生（総合理数学科）の調査研究で、徳島市を流れる冷田川・田宮川の河川水にもトリクロサンとトリクロカルバンが含まれていることが明らかになっています。身近な問題です。私たちは、これら二つの抗菌剤がリンパ細胞の細胞内亜鉛イオン濃度を上昇させることを見出しました（2012年）。トリクロカルバンについては石鹸を用いた後のヒト血中で報告されている濃度レベルでリンパ細胞の細胞内亜鉛イオン濃度に影響を与えます。米国のブルース・ハンモック先生らの研究（2012年）では、トリクロサンが筋肉の収縮を妨げて、ファットヘッドミノー（小魚）の遊泳能やマウスの心機能を低下させることが報告されています。これらは細胞内カルシウムイオン動態の異常が考えられています。亜鉛イオンとカルシウムイオンは拮抗的に働くことがありますので、亜鉛イオン濃度が上昇すれば、カルシウムイオン動態への影響も当然のことでしょう。日常生活で用いている石鹸やシャンプーなどのパーソナル・ケア商品に含まれる抗菌剤が河川水で検出されること、化学物質である抗菌剤に細胞レベルでいろいろな作用があることは当たり前のことです。生活が便利・快適になればなる程、何らかの形で環境に負荷がかかることも当たり前です。「何か」を使うと知らないところで「何か」が起こります。何か一つに関心を持ち「漏れ」を止めても、気が付かないところで「漏れっぱなし」になっています。環境に関わる問題は難しいものです。

臨床心理学者が考える

「子どもが健やかに成長するために親ができること」

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 准教授

境 泉 洋



ひきこもりについて研究している臨床心理学者の立場から、子どもが健やかに成長するために親ができることについて述べたいと思います。

ひきこもりをはじめとした若者の社会的自立の問題は、少子高齢化とも相まって、現在の日本における最重要課題のひとつになっていると言っても過言ではありません。ひきこもりの現状について少し触れさせていただくと、ひきこもっている当事者の平均年齢が30歳を大きく越えて高齢化していることが指摘されています。この現状は、いったんひきこもりになると自力ではなかなか抜け出すことができない事実を物語っています。

ひきこもりは、苦手なことを避けることから始まります。意外に思われるかもしれませんが、ひきこもりは楽しいものではありません。しかし、辛くもありません。楽しくもないし辛くもない状態が想像できるでしょうか？それは、「無」ともいえる状態です。

長年ひきこもった方に、ひきこもっていた期間の事を尋ねると、「あんまり記憶に残っていない」とか、「あっという間に過ぎました」と述べられます。心理学的に申しますと、記憶とは感情を伴うことでよりよく定着します。つまり、ひきこもっている限り、辛くはないけど楽しくもないので、感情を伴う体験が少ないためにひきこもっていた期間のことが記憶として定着していないのです。

ひきこもりをはじめとした子どもの問題に親はどのように対応すればよいのでしょうか？ひきこもりは苦手な場面を回避することから始まると言いましたが、この逆をやるのが子どもの健やかな成長に効果的です。つまり、得意な場面に積極的に参加して、自信をつけるということです。苦手な場面に向かう時、多くの人是不安を感じてしまいます。それに対して、得意な場面であれば楽しむことができます。

この不安と楽しいという対極の感情は、人にそれぞれ異なる影響を与えます。不安は人を委縮させてしまいます。逆に楽しいという感情は人を元気にするのです。

子どもに接するときに、大人はどうしてもしてはいけないことばかり話をしてしまいます。人に迷惑

をかけてはいけない、危ないことをしてはいけない、などです。もちろんこうしたことを教えることは重要なのですが、注意しなければいけないのは、してはいけないことをしない子どもがいい子どもだと勘違いしてしまうことです。こういう接し方は、子どもにも、悪いことをしない子どもがいい子どもなんだと思わせてしまいます。

子どもに接するときに必要なのは、していいことを積極的にできるような環境を整えてあげることです。人助けをすると自分もうれしくなるよ、楽しいことを思いっきりできるといいね、など、してよいことを話してあげられると子どもは元気に毎日を過ごせることでしょう。

ひきこもりを経験した方のお話を伺うと、いろいろなことに不安を感じて委縮していることが多く見受けられます。ひきこもりを経験した方が委縮しているのは、それまでの失敗経験によるものが大きいです。ひきこもりから抜け出すのに必要なのは、不安を克服することではなく、楽しい感情をたくさん経験して元気になることです。こうしたことから、楽しい感情をたくさん経験できた子どもはひきこもりを経験することなく、健やかに成長できるのではないかと、私は考えるのです。

このような紙面をいただき、臨床心理学者として日々感じていることを書き綴らせていただきました。皆様の何かの参考になりますれば幸いです。

最後に、この度、総合科学優秀賞を受賞いただきましたが、この賞に恥じぬよう、本学の発展に貢献するとともに、教育者、研究者、臨床家として精進して参る所存です。



スタートライン

S T A R T L I N E

新しい環境で

大阪大学大学院 文学研究科文化形態論専攻 博士前期課程1年 井上まゆ子

私は総合科学部アジア研究コースを卒業後、大阪大学大学院の文学研究科に進学し中国哲学を専攻しています。この半年間、新しい環境に馴染めず悩む毎日でした。

中国文化に興味のあった私は、主に中国の歴史や文学、中国語の講義を学部で受講していました。アジア研究コースの先生方は中国語教育に熱心で、日本人の先生もネイティブの先生も丁寧に教えてくださいました。私は1年間の語学留学を経てHSK6級（漢語水平考試）を取得しましたが、先生方の協力なくしては実現できなかったでしょう。最後に中国古代思想を専門とする指導教官の下で卒業論文を書いたことが、文学研究科の哲学専攻に進むきっかけとなりました。

大阪大学に入学して驚いたのは、研究室や図書館に徳島大学にはなかったあらゆる漢籍が収められていることです。基本となるテキストだけでなく、中国の古典研究の最前線である新出土文献（近年になって中国で発掘されている新史料）や他の貴重資料なども揃っています。また大阪大学文学部の演習は学部生と院生と一緒に受講する形式がとられ、学生たちは早くから互いに研鑽し合う習慣を身につけます。

本来、整った環境で研究出来ることに対して私は感謝しなければいけません。しかし私の実力は大阪大学にすぐ順応できる水準に達していませんでした。

大阪大学の中国哲学研究は、主に『老子』など思想書の新出土文献の読み込み（それまでのテキストと新しく見つかったテキストの比較）や、江戸時代の懐徳堂（大阪大学の前身）の儒学者達が残した文物の読み込みです。正統派の哲学研究を行う大阪大学の学生は学部2年生の段階で漢籍の知識を得ています。私は院生であるにもかかわらず漢籍に疎く、演習の資料集めでも彼らに敵いません。また、徳島大学では「中国古代思想」を文学や民俗学の方向か

らアプローチする研究方法を取ることが多かったのですが、大阪大学ではそういったことは行われません。今まで勉強したことを活かせず鬱々とした気分になりました。

学部で培った文化の知識、語学力を活かすことができず、講義に出席すれば年下の学部生よりもビクビクしている私を尻目に、研究室の皆は着実に各自の研究を進めていきます。徳島大学の先生方からの「大学院は厳しいから覚悟するように」という忠告を思い出し、「進学しない方が良かったのかもしれない。目標を見失った私が研究室にいても邪魔になるだけだから中退したい」と塞ぎ込む毎日が続きました。

周囲に相談することができず、徳島大学の大学院に在籍する友人に、研究生活が辛いと打ち明けました。すると友人は「私も他大学から徳島の院に来て最初は戸惑うことばかりだった。でも先輩とか後輩とか考えずにわからないことは質問することにして、馴染むように努めた」と言いました。

友人の言葉を聞き、自分が周囲に溶け込む努力をしてきたか振り返ってみました。私は常に「外部から進学してきた自分はどう思われているのか、出来の悪い院生だと思われているのではないか」という不安が先行し、口数が少なくなっていました。このことに気づき、研究の疑問でも雑談でもとにかく研究室のメンバーと会話するようになりました。丁寧なアドバイスをいただいたうえ、皆との親睦が深まりました。人から馬鹿にされたくないという余計な意地が、新しい知識を得る機会を邪魔していたのです。

学習環境の大きな変化に困惑し焦っている間に半年が過ぎてしまいました。しかしこの間に得た教訓を胸に刻み、修了時には「大阪大学で学べて良かった」と言えるよう、気持ちを切り替えて前進したいと思います。

（平成25年人間社会学科アジア研究コース卒）

新生活を通して感じたこと

徳島大学大学院 総合科学教育部臨床心理学専攻 修士1年 徳永 沙智



私は徳島大学総合科学部に入学してからの4年間、心理学について学び、現在は臨床心理学専攻の大学院生として新たな生活をスタートしています。

私が心理学に関心を抱いたのは高校生の頃でした。進路に迷い、これまでの自分の悩みや体験、社会での出来事を振り返ったとき、「現代社会に生きる人々の健康は身体の不調だけでなく、こころの問題によっても損なわれてしまう」こと、「そうした問題を抱えながら、普通の生活をするのが難しく、生きにくさを感じている人がたくさんいる」ということを知ったのがきっかけでした。そして大学での勉強を通し、人の役に立つ仕事がしたい、悩んでいる人たちに寄り添いたいという思いを強くしました。

大学院では、臨床心理士として社会に貢献するために必要な知識と経験を得るべく、さらに専門的な勉強に日々追われています。講義や実習、課題などを毎日こなす忙しさの中で、心理学という分野が求められている領域は想像以上に広いということを知りました。しかしその一方で、そうした領域で心理士として働いていくことの難しさや現状を知り、学ばなければいけないことが山積みの新生活のスタートは大きな壁を感じる時期でもありました。自分は何をしたいのだろうか、果たしてやっていけるのだろうかと不安に思うこともあり、大学とは大きく変わった生活の中で戸惑ってしまうことも少なくありませんでした。

そんなときに支えとなったのは、現在同じ院生として一緒に頑張っている同期や先輩方、そしてこれまでに大学で出会ったたくさんの友人達とのつながりでした。同じ悩みを話し合い、時には皆で集まり

楽しく気分転換をしたり、困ったときはお互いに助け合ったりと、同じ時間を過ごす皆さんには今の生活になくてはならない大きな励ましを貰っています。今は違う道に分かれ、離れ離れとなってしまった友人達も、時折元気な姿を見せてくれて、会えばあの時と何も変わらず、大学生活を思い起こすような楽しい時間を届けてくれます。立場は違っても、新しい視点からの励ましや、それぞれ院生や社会人となった大変さを感じながら毎日を精一杯頑張っている姿に、私も刺激を受け勇気づけられました。

大学院での勉強を通して、さまざまな人とのつながりは、普段の生活ばかりでなく、臨床心理学を考える上でもとても大切なものだと感じるようになりました。あらゆる職域や同じ組織で働く人々との協力関係、そしてクライアントとの1対1の信頼関係をつくっていくことは、心理的な支援を行うとき必要不可欠なものです。また、支援する相手の一人ひとりを深く知り、多角的な視点から理解することも重要です。生身の人間と接していく以上、どのような仕事においても、知識ばかりに埋もれずに、しっかりと目の前の人々とのつながりを意識しなければならないのだと実感しました。

将来に不安や迷いは尽きませんが、「今、この瞬間」を大切にしながら、すべきことをやり、これからどんな風に人と関わっていきたいかということ、そして自分の色々な可能性について、ゆっくり考えていきたいと思えるようになりました。今、新たなそれぞれのスタートラインの上で共に立っている皆の横顔を忘れずに、私も一歩を踏み出してみたいと思います。

(平成25年人間文化学科心理・健康コース卒)

総合科学部で実感した世界の広がり

辻井 佑生

私は、徳島大学総合科学部社会創生学科公共政策コースを平成25年3月に卒業しました、辻井佑生と申します。今春から一社会人としてのスタートを切ったのですが、本記事のタイトルである「スタートライン」にちなんで、学生時代の生活や心境など社会人としてのスタートラインに至るまでを振り返りつつ書かせていただきたいと思います。

まず初めに、私が徳島大学へ進学を決めた理由について話させていただきます。話は中学生時代の進学の時期にまで遡り、どの高校に進むか考えていた私に当時の担任の先生が理系のコースへの進学を勧められたことから始まります。私は昔から社・国が得意な反面理・数はあまり得意ではなくとても悩んだのですが、きっと辻井君のためになるという先生

の言葉で決心し、「高いレベルの中で採まれば気を抜くことなく3年間頑張れるだろうし、苦手な理数も克服できるかもしれない。」と考え、そこへと進学しました。そのため高校時代の私は理数系科目を重点的に学習している一方、得意科目は社会系や国語系といった一風変わった生徒になっていました。

そして、3年間の高校生活を何とか乗り越えつつ進学する大学を決める際に、どんなことを学びたいのかということのを改めて考えると、「せっかく理系科目を頑張ってきたのに加えて文系科目が得意であるという長所もあるのだから、文系・理系の両方の様々な分野について学んでみたい。」という思いが沸き出てきて、ふと見かけた総合科学部の案内の中にあつた文理の枠にとらわれない学際的な研究を行う、という理念に一目で共感し進学を決意しました。

このような思いを抱いて入学した総合科学部だったので、入学後は学科の専門以外にも、少しでも興味を持った分野の勉強には時間の許す限り全力で取り組みました。その過程で特に心惹かれた国際政治学の研究室に3年次から所属し、饗場和彦教授の熱心な御指導の下、国際社会の現状や課題、戦争や平和の仕組み、国際協力の在り方などについて深く学んでいきました。

総合科学部における学生時代を総括してみると、好きなことばかりに一生懸命に取り組むことができた時間であったと感じます。私にとってそれは色々な新しいことを知ることでした。様々な分野の事象を見聞きして新しい知識を身に付けていくことはとても楽しく、自分自身の周りにある世界がどんどん広がっているという感覚がありました。広く深い“T字型”の学びを進めることができ、入学した時の思いが達成できた良き日々であったと感じています。反面で、学業に注力するあまりその時間や労力を確保すべく、アルバイトや部（サークル）活動、ボランティアなどに取り組み、それを通じてたくさんの経験をするというある意味“大学生らしい”ことを

疎かにしてしまっており、もったいないことをしてしまったと後悔しているところもあります。

徳島大学を卒業した現在は、お声をかけていただいた徳島市内の中学校で社会科の臨時教員として勤務させていただいています。教員を志望した理由は、高校時代に会つたある先生の影響です。その先生の授業はとてもためになったと思わせるもので、授業を通じて「勉強することは楽しい」、「新しいことを知ることができるのは嬉しいな」と感じ、様々な分野の勉強をしてみたいという自分の将来を決めるきっかけになりました。そして同時に、私もこんな風に他の人の将来の進路や夢を叶える手助けをしてみたいと憧れを抱くようになり、総合科学部で普段の学びのかたわらで教員免許を取得しました。

4か月ほどですが実際に教壇に立ってみて、学ぶべきことを時間内に的確に且つ興味を持ちやすいようにアウトプットする難しさに直面しながら、日々生徒との関わりの中で悪戦苦闘し、試行錯誤しています。落ち込んだり後悔したりすることも多い毎日ですが、何より自分で決めて飛び込んだ世界なので、努力を怠らず、いつか生徒が“より良い”将来を選択するために彼らの知る世界を広げることができるようになりたいと思います。

最後に、この拙文をお読みくださった皆様へ2つの言葉をお贈りしたいと思います。1つ目は「若いうちは買ってでも苦勞しろ」。色々な経験をしたくても時間があるのは若いうちだけなので、先行投資してたくさん苦勞し、自分を高め広げることが重要である。2つ目は「青は藍よりいでて藍よりも青し」。自分の目標とする人や何かを教えて頂いた人はもちろん、過去の自分を1つの見本として、今の自分がそれを超えていこうとする向上心を忘れてはいけない。この2つの言葉は、私の人生において大きな存在である饗場教授と高校時代の先生から頂いた言葉であり、私が常に心に留めている大事な言葉です。

(平成25年社会創生学科公共政策コース卒)

社会人になって

佐藤 由希

私は現在、香川県にある会社に就職し、品質管理課で仕事をしています。私がこの会社を選んだのは、職場の雰囲気が良かったということが一番大きな理由です。就職活動を行う中で業界や職種なども重要視していましたが、それでも働く環境が自分に



合っている会社に入りたいと思っていました。今の会社の面接を受けた時に、それまで受けてきたどの会社とも異なり、とても和やかなムードを感じました。そして、社員の方々もとても親切だったので、業界など関係なくこの会社に入りたいと思いまし

た。実際に働きだしてから、私の受けた印象通りの会社で、私の部署ではいつも笑顔が絶えず、楽しい環境で仕事ができています。

私の所属している品質管理課では、お客様からの調査依頼、品質向上のための対策、クレームの対応、ISO 関連の仕事など、本当に幅広い仕事を行っています。また、その他の部署の手伝いなどを行うこともあります。

私は以前、品質管理課は検査などが主な仕事で、検査に必要な知識が最も大切な仕事だと思っていました。しかし、実際に働き出してみると私の予想していたものとは全く違っていました。営業の方とは、お客様からの意見を聞いたり、一緒にお客様のところに説明に行くこともあります。また、工場で製造している方々とも品質向上のために対策を立てたりもします。そのため、検査業務の知識だけでなく、機械についての知識や工場内外の設備についての知識、お客様の会社についての知識など本当に幅広い知識に加えて、コミュニケーション能力が必要な仕事だとわかりました。私は、今は検査業務や報告書の作成などがメインで仕事を行っていますが、ゆくゆくはその他の仕事も任されるようなので、早く多くの知識を身に付けたいと思っています。そして、会社をさらに良くするために少しでも貢献できたらと思っています。

入社して数カ月が経ち、ようやく社会人としての生活や仕事にも慣れてきました。最初は初めてのこ

とばかりで大変な毎日でした。仕事に関しては、化学系の仕事であるため、大学で数学・情報を専門に勉強してきた私にとっては初めてのことばかりで、覚えるのが大変でした。大学では実験なども行ったことがなかったため、機械を使って調査するということが初めてで、使い方を覚えるのに時間がかかってしまいました。また、私はこの4月から人生初めての一人暮らしをしています。生まれ育った土地を離れて一人暮らしをするにあたり不安はありましたが、同じ部署の方々がいつも気遣ってくださることもあり、充実した毎日を送ることができています。

現在の私から在学中のみなさんへのアドバイスとしては、今ある時間を大切にしてほしいということです。社会人になるとやりたいことがあっても時間がなく思い通りにできないことも多いということを実感しました。そのため、比較的自由な時間が多い学生時代に、大学での勉強やサークル、バイトなどを含め、自分がやってみたいと思うことはぜひチャレンジしてほしいと思います。また、社会人になると友達と会う機会も減ってしまうので、友達との時間も大切に楽しい思い出をたくさん作ってほしいと思います。そして、そのように学生時代にたくさんの経験を積むことで、社会人という新しいスタートラインに立った時に役立つことも多いのではないかと感じます。

(平成25年総合理数学科数理科学コース卒)

大学生活を振り返って

清水 康夫

私は、2013年3月に総合科学部総合理数学科数理科学コースを卒業しました。現在は、徳島県内の高校で数学の非常勤講師をしています。ここでは、徳島大学に入学した目的や学業の面での学生生活について書いていきます。

私は、大学に入学する前から数学が好きで、将来数学の教師になるという目標を持っていました。だから、数学の教員免許を取得できる大学へ進学しようと考えていました。教員を目指すのであれば教育大学へ入るという選択肢もありましたが、高校まで数学を学習していく中で、大学でさらに専門的な内容を学びたいという気持ちも持っていました。そこで、徳島大学の総合科学部であれば、この二つの目的をどちらも果たすことが可能であるので進学することに決めました。

大学一年では、数学に関する講義の受講は僅かで、教養科目の講義の受講が中心でした。これは、全学共通教育と呼ばれていて、大学での学びに適応し、主体的に知的訓練に取り組む態度を身につける、社会人として必要な豊かな人間性と高い倫理観を修得するなどの目標のもとで開設されているものです。教養科目といっても、その内容は幅広く、中には自分にとって興味のない内容の講義もありました。しかし、どの講義にも休むことなく出席し、勉強を疎かにしなかったことで、今まで触れてこなかった分野について理解を深めることができ、様々な視野を持つことができるようになったと感じています。

二年になってからは、数学の専門科目の学習が中心となりました。高校までの数学では意識したことはなかったですが、大学では代数学、解析学、幾何

学など分野がはっきりと分類されていて、学習していくうちにそれぞれの分野に違った特徴があるということに気がつきました。ただ、特徴が違ってその内容によっては異なる分野同士が関連している場合もあり、そこが数学の奥深さなのだと感じました。学習した中で一番興味深かったのは、幾何学のグラフ理論でした。頂点と辺により構成されたグラフの性質について研究する学問で、今まで学習してきた数学とは全く違う印象で、問題について考えるのが楽しいと感じた分野でした。

四年の時には、教授の推薦があり、財団法人康楽会が創設している学業成績等が優秀である者を表彰

する康楽賞に応募したところ受賞することができました。何に対しても精一杯の努力をするという今までの成果が認められたということで大きな自信になりました。

大学を卒業し、社会人の立場になりましたが、大学で学んだ内容が全て役に立つかどうかはわかりません。しかし、学ぶ姿勢というのは大学でも社会人でも必要なことだと思います。これからも私は、何事に対しても学び続けていく姿勢を忘れずに努力していきたいと思っています。

(平成25年総合理数学科数理科学コース卒)

徳島大学での4年間を振り返って

瀧川 正之

私は2009年に徳島大学総合科学部に入学し、2013年に卒業しました。徳島大学を卒業した現在、徳島県で中学校助教諭として理科の教科を専門に教えています。徳島大学に入学した経緯と当時の学生生活について振り返っていきこうと思います。

私は徳島が大好きでした。徳島には美しい海、盛大な河川、豊かな森林があります。そして、なにより徳島に住む人たちは思いやりに溢れています。そのため、まずは徳島県の大学に進学先を絞りました。徳島県の大学の中でも徳島大学を選択したのは、教員になることを志望していたことが大きな要因になりました。徳島大学では教員免許が取得できます。さらに、大学ゆえの高い専門的な知識だけでなく、幅広い方向への視野を持った人たちが集まります。徳島大学ではそういった多くの人たちとかわることができるのです。中学校の教員というのは、生徒を知るために、専門的知識に加え多くの趣味や価値観を知っておかなければなりません。そのために、徳島大学は最適でした。実際に、徳島大学に入学してからというものとはとても充実した学びの日々を送ることができました。今になって振り返ってみると、徳島大学での4年間は、自然に学び、人に学んだ4年間でした。

徳島大学での1年目には、理系・文系にとらわれない教養を学び、新しい仲間との絆を深めました。2年目からは物質総合コースに所属して4年での卒業研究に向けて、研究の基礎となる実験技術を学びました。何度も何度も失敗して、そのたびに先生方や先輩方に励まされ、助けられる中で、諦めずやり遂げる力を身につけることができました。また、教

員となるために、学校支援ボランティアや復興支援ボランティアに参加する機会をいただき、今の学校現場や東日本大震災の現状を学ぶことができました。4年生では、本格的な研究が始まり、自分の調べたかった「徳島県海部郡の津波避難路の安全性評価」について探究しました。まさか、大学で地元に関連した研究をさせて頂けるとは思わなかったもので、研究への意欲は非常に高まりました。研究では図面上での作業が多いですが、ときには、現地へも赴き調査したり、地域住民から聞き取りを行うなど、多彩な経験を積むことができました。

徳島大学での4年間を活かすべく、私は本年度から徳島市の中学校で、1年生の担任として勤務しています。4月に初めて勤務校へと足を運び、生徒のいない職場から私の教員生活がスタートしました。入学式まで生徒が学校にいないのは当然なのですが、それでも不思議な気持ちでした。入学式までの数日は生徒がどんな性格なのか、どんな表情なのか、楽しみで楽しみで仕方ありませんでした。生徒と対面してからの日々は、多忙ながらも充実しています。1年目ということもあり、学校での生活はわからないことだらけです。作業一つ一つをとっても、先輩の先生方を見て聞いて学びながらのために、遅くなることが多いです。それでも、生徒との関わりを大切に日々生活しています。現場に出てみて、私が一番大学で学ぶことができよかったことは、やはり協調性だと思います。職場での協調性は大切です。教員同士、教員と生徒間でも、協力して助け合っていかなければなりません。自分勝手を許さず「誰かのために」という力を育てたいと考えて

います。そのため、学級目標にも助け合いと支え合いを入れて、毎日の朝の学活で全員で読み上げています。私は自分の生徒に誰よりも強く大きくなってほしいとは思いません。ただ、私がそばを離れてからも、社会を生き抜けるだけの力を身につけさせたいと思います。

こうして学生生活を振り返り現在を考えると、多くの人に支えられていたことに気づかされます。大学の先生方、友人、今まで私を成長させてくれた多くの人たちに心より感謝申し上げます。

(平成25年総合理数学科物質総合コース卒)

自分の選んだ道のスタートラインに立って

安田 侑右

皆様、こんにちは。私は平成25年3月に総合科学教育部地域科学専攻を卒業後、いであ株式会社に入社し、現在、6年間住んだ徳島を離れ富士山で有名な静岡県環境創造研究所で研究員として勤務している安田侑右と申します。私の会社は環境・建設コンサルタントとして主に国や県などの官公庁が行う事業や民間企業から仕事を受注し、河川計画・橋梁の設計などの社会基盤整備や災害復旧計画、環境影響評価、理化学分析・実験、水辺のアメニティなど多種多様な事業を展開しています。また大学などとも共同で研究を行っていたりするので幅広い方々と一緒に仕事ができるのも特徴の一つであり、コンサルタントの魅力でもあります。

その中で私は魚やミジンコ、微生物などの生物を用いて日常で使用される化学物質や工場排水の安全性評価など化学物質が環境に与える影響について調べる仕事を行っています。豊かな生態系を保全するために水生生物を使用して化学物質の影響を調べることは重要な実験であり、やりがいと同時に責任を感じています。研究所では主に室内で生物の飼育・培養や生物実験、実験結果の解析などの作業を担当しています。生物を扱っているため毎日の飼育管理の作業は非常に重要です。飼育作業を誤ったり、怠ったりすると生物の調子を一定に保てなくなり生物実験で良い結果を得ることができず、再び同じ実験をしなければいけません。扱っている生物の種類によって飼育の作業は異なるため間違いがないように作業一つ一つを正確に、丁寧にやることを心掛けています。

最近になり会社の雰囲気や周囲の環境にも少しずつですが慣れてきたように思います。しかし、まだまだ覚えることは沢山あり、一回聞いても理解できず何回か聞き直したりして先輩方に迷惑をかけてしまいます。先輩方からは分からないことはあって当然だから分からないことがあればすぐに聞いてと声をかけていただいたおかげで、分からないことも聞

きやすく、また忙しい時間の中でも丁寧に教えていただけるので、非常に働きやすい職場だと思います。毎日仕事は大変ですが、できることが少しずつ増えていき新たな仕事を任せられることに喜びを感じています。

この仕事は在学中に研究室で行っていた研究と近い職種なので研究室で得た知識や技術、経験など今の仕事に活かせる部分は多くあります。しかし、会社では大学の研究とは異なり作業の効率化や新技術などを考えること常が要求されます。そのため従来の発想にとらわれないアプローチや高い専門知識などが必要とされるため大学の頃よりも現在の方が勉強している気がします。大学の頃にもっと勉強しておけばよかったと今になって後悔しています。また在学中に参加した学会などでは多くの研究者や企業の方と話す機会が多くあり色々な方と出会ったことは貴重な経験だったと思います。大学での研究を通じて色々な方と話すことにより自分自身が成長でき、多くのことを学ばせてもらったことに大変感謝しています。徳島大学に伺わせていただくときには、人として研究者として、さらに成長した私であるように日々感謝の気持ちを忘れずに精進していきたいと思いますのでよろしくお願い致します。

(平成25年大学院総合科学教育部博士前期課程地域科学専攻修了)

草創期の恩師を偲んで

山田 秀雄

昭和25年、四国御巡幸中の天皇陛下が徳大にお見えになった。学内御視察と小田信夫、岡田克弘、藤井芳一各教授の研究を御聴取の後、我々は陛下を医学部校庭にお迎え申し上げた。春雨煙る3月26日、遙かに奉迎台上の陛下を拝して、やはり万感胸に迫るものがあつた。万歳を三唱し君が代を奉唱した。陛下は帽子を高々と掲げて実直にお応えになった。

小田先生の心理学の翌日の講義はその時の話から始まった。「天皇は万世一系の資質を受継がれ、それが最高の環境と教育とによって実に清らかなお人柄となられたと思う。身近に知能テストの原理について御説明申し上げ陛下間を受けて益々それを感じた。天皇陛下は実に理想的な人間のお姿と映った」と言われた。先生はいわゆる「優秀ゲシュタルト」の典型をそこにお認めになったのだが、さすが円覚寺参禅で鍛えられた先生の尋常ではない洞察力をそこに見た感じがした。

社会学の富野敬邦先生は徹底した原典主義の方で、コントに始まって著名な社会学者の殆ど全ての著作を列挙され、それらを謄写版で印刷し解説された。

先生は体軀堂々たるお体でいつも汗をかいておられ、デュルケムさえ二つに分けて発音される程苦しそうであった。

「私に年賀状をくれたら返事は出して上げよう」とおっしゃった。石井町の御自宅から確かに御返事は頂けるのだが、只裏側に「富野敬邦」という署名だけの簡単な返事で、いかにも先生らしいと思った。

その頃の校舎は兵舎や格納庫を運んで来たものである事は既に知られた所であるが、その工事にアルバイトとして参加した友人もいた。当時の失業対策の日当は120円位であった。因に2学年からの僕たちの大学への納付金は4,500円で、それを期限内に納めるのに本人も親も皆苦勞していたと思う。

教室内では机と椅子が一体になったものや4人掛けのものなど、何れも古くて重量感のあるものばかり。掃除をされていたお婆さんはその重い机をお一人で動かしては棒雑巾で床を拭いておられた。僕らは中学時代の掃除当番から解放され、大学生は楽だなあ、とばかり雑談に耽っていた。丁度その時世界史の井上忠義先生が通り掛られてその様子に気付か

れた。「君ら話ばかりしとらんと机ぐらい運んだらどうな！」と日頃無口な先生が一喝され、僕たちに芽生え始めた特権意識らしきものに対してそれは正に頂門の一針であった。

その井上先生は中昭和町の御自宅から通われ、原稿用紙を分厚く束ねた資料を開いて講義をされていた。特に米國史やヨーロッパ史を詳しく教えて頂いたが、その朴訥な口から時折フランス語が飛び出すのも面白かった。

経済の橋本純二先生にも授業中の脱線話が多かった。「慶応時代の同じクラスに野呂栄太郎がおって、義足の音をガチャガチャ言わせ乍ら机と教壇の間を往き来しもって議論をしとったな。さすが大物と皆が尊敬しとった。その後官憲に捕らえられ33歳で獄死した。あの『日本資本主義発達史』を書いた、いわゆる講義派をリードした優れた経済学者だったんだが……」としんみりされた。

「経済や法律にはフランス語も必要だから」と希望者には積極的に、しかもかなりの密度で講座を開いて下さった。テキストにはモーパッサンの『初雪』を選んで下さった。いきなり郊外の雪景色が展開され、先生は「はく、がいがい…」と言われ、蒲池先生のあれだな、と思った。美しい少女が現れて僕は胸を躍らせる。

先生は女性に事寄せて言うのがお好きだった。

「モンマメ、トンタテ、ソンサセ」には皆が笑った。河野君がそれを真似て又笑わせる。「いり屋の娘、宿屋の娘、お照……」要するに駄洒落なのである。とにかく笑わせ、口真似させて繰り返させるのが御方針だった。

誰かが「フランス語の辞書や高うて買えんわ」と言うと、先生は「いや、当分英語の辞書で間に合うけんな」とあっさり言われてしまった。先生も随分無茶なことをおっしゃったものだが、今にして思えば、これも皆を落胆させまいとする先生の温かい御心遣いだったのだ。

恩師の言動は尊いものである。たとえそれが何気ないその場限りのものであったとしても、それが教え子の心に響いたものであれば尚更のこと、思い出の中、心の中に生き続け、時として人生の有り様を

決めてしまう事さえあり得る。今自らを省みて血肉となっているものは、ただ単に学んだ知識のみならず、恩師の愛とその言動によるものが多々あること

をこの老齢にして沁々と感じるのである。

(昭和28年中学校課程音楽教室卒)



満目蕭条…それでも総合運動場『秋季大運動会』

エッセイ

地形図を読む

阿南市文化財保護審議会委員 東 明 省 三

私は昭和25年5月8日に、徳島大学学芸学部中学校教員養成課程に入学し、29年3月20日に卒業した。大学では理科を専攻して、地学教室に所属した。当時の地学教室には、25年初めに着任されたばかりという気鋭の須鎗和巳先生と中川衷三先生がおられた。

他の教室と異なり、一種独得な雰囲気があったのは、お二人共に旧制大学理学部出身だったからと思われる。校地のあちこちには、戦火の跡が残り、校舎も設備もお世辞にも立派とは言えない大学だったが、どの先生方も教育と研究に情熱を傾けておられ、私どもを熱心に指導して下さいました。

昭和29年4月、那賀郡宮浜村宮浜中学校（現上那

賀中学校）を最初に、9年間の中学校勤務後、38年に高校地学の必修化にともない富岡西高校へ転任。以後、県南部の高校や県教委で勤務し平成4年3月に定年退職。その後9年間、鳴門教育大学（非常勤）や那賀川町科学センターに勤めた。

ところで、大学在学中から現在まで、地質や地形の調査で、多くの地形図を使用した。社会一般では、地形図はまだ十分な市民権を得ていないようである。

平成17年8月初め、72歳で、近所の人々と、石川県の白山に初登山した。バス2台で、福井県勝山市を経て石川県白峰村へ。午後0時30分、登山開始。登山口の別当出合売店（1100m）で「皆さん、ほん

まに登れるんで」と心配された平均年齢65歳の一行だった。

日帰り登山によく使われるという砂防新道と名付けられた登山道は、見晴らしは今ひとつだったが、整備された広い道で、多くの下山者に出会いながら歩いた。標高2100m 辺りから這松が見え始めて心が安らぐ。白山は、日本で這松が見られる西の端であり、大正時代まで、雷鳥が生息していた山でもある。

緩やかな斜面の広がる弥陀ヶ原には、何種類かの高山植物が花を咲かせていた。5～6時に、無事、クロユリの花が咲く宿泊地の室堂センター(2450m)に到着。夕食の後、明日の下山道の予定を引率責任者(65歳、剣山講大先達)に聴くと、弥陀ヶ原から右(西)へ分かれる観光新道を下りるという。

昼食時に配られた簡単な案内図には、下山に適した道とあったが、引率者も初めての道だとのこと。所持している5万分の1「白山」と「越前勝山」では、広い尾根を下る緩やかな坂道がつづいた後、別当出合へ下る辺りが大変な道のように読めたので、「今日、登った道が下りにも良いと思う。何よりも、責任者も初めての道を、皆を連れて下るのは如何なものか」と意見を言ったが、「私は地図が読めないが、登って来た道をまた下るのは面白味がない」と言われて、観光新道を下ることになった。

翌日、未明に頂上の御前峰(2702m)の白山神社奥宮に参拝して、ご来光も拝した。センターで朝食の後、下山開始8時30分。昨日の弥陀ヶ原からの分岐点で、私は一人でも昨日の道を下りたかった。予想していたとおり、道幅は昨日の道の半分以下で、下って行くのは私等のみ。大きな溶岩が頻繁に道を

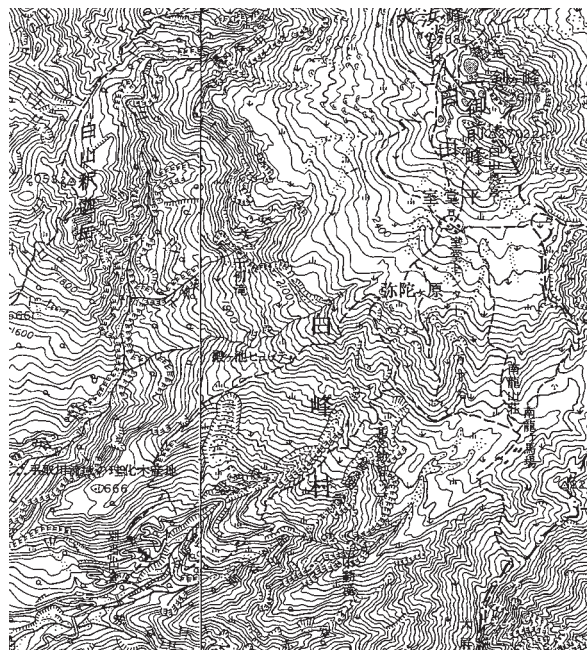
塞ぎ、避けて迂回したり、時々登って来る人に出会う度に、道からそれて熊笹の中へ入らなければ、行き交いできない狭い道だった。途中で昼弁当を食べた。

さらに、谷筋へ下る1km余りは惨憺たる道で、突っ込んでいくような急傾斜の雨裂谷の中、50～70cmの高さの木製の梯子段が70度程の斜度でつづいた。登る人をやり過ごして下るため、正午過ぎに帰りのバスに乗る予定が、大幅に遅れて午後3時過ぎとなり、帰宅は真夜中になった。引率者が地図が読めない、自分も通ったことがない道でも連れて行く。事故こそなかったが、下りに足を痛めた人が多かった。

最近、山川町の河岸段丘調査で、2.5万分の1「脇町」を使用したとき、山川町東部の集落名注記の表示位置が気になった。こうした自然・人文の地物を表す地名は、各市町村町長名で国土地理院長に提出される「地名調書」に基づいているが、集落のような広がりを持った地名をどの位置に表示するかは、製作者・使用者共に考慮を重ねるべきことである。

地図上の「その位置」に書き込める場合は問題ないが、例えば、注記によって物体記号である点描家屋が消されてしまうのを避けるため、集落の上・下側や右側・左側に書かれた場合、集落名の注記位置は、集落の真位置を示さないことになる。地形・地質調査の結果を報告文にまとめる場合には、以上のような地図上の約束事をよく知り、さらに、地名調書そのものの誤りから生ずる、地図の誤りを現地で訂正して、書かなければならないことは言うまでもない。

(昭和29年中学校課程地学教室卒)



国土地理院 平成14年発行 5万分の1「白山」・「越前勝山」による(原寸のまま)。

人生の不思議

大川 美和 (旧姓 川本)

まだまだ恩師のような授業には程遠い。

気づけば中学生時代の恩師の理科の授業を目指していた。考えることが楽しいと思う授業、そんな授業を目指して日々奮闘している。

といってもこのような生活は昨年からはまった。四捨五入をすると40歳になるというのに、突然の異動で小学校から中学校勤務を命じられた。一からやり直した。

教師になろうと考え始めたのは大学在学中からである。何となく教職課程をとり始め、就職を考える頃になって教師の道に進もうと決めた。しかし、そう簡単に受かりはしなかった。中途半端な社会的身分に不安を感じ、企業経営の塾に就職した。最初の数年間は楽しかったが、塾で小学生と中学生を教えていくうちに小学校教員になりたいという気持ちが強くなった。そこで、通信教育で小学校教員の免許を取得し、採用試験を受けたところ見事合格した。30歳の出発である。同年代の先生よりも遅れていると感じ、必死の6年間だった。そして7年目、ようやく小学校教員に慣れてきたと思った頃、中学校への異動を命じられた。予定外である。

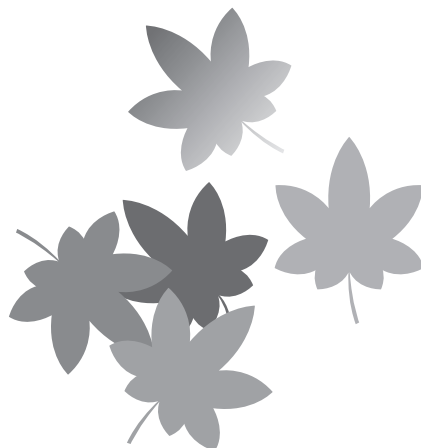
一時期はなりたいたと思っていたものであるが、中学生との接し方、自分の専門知識、教員としての経験など、どれも自信がなく不安でいっぱいだった。しかし、先輩の先生方に恵まれ、なんだかんだと中学校理科教員として今年で二年目を迎えている。

大学を卒業しているとはいえ、理科のあらゆる分野に詳しいわけではなく、勉強すべき内容が山のようにある。しかし、好きな科目であるからそれも楽しい。楽しいけれども、授業は思うほどうまくはいかない。恩師のような授業、そんな授業を行おうと思えば思うほどできない自分がもどかしい。教える立場になって初めて、恩師の知識の広さ、深さを感じる。中途半端な知識ではできないことを痛感した。

一度あきらめた夢が15年目に叶っている。うれしいのかうれしくないのかよくわからない。歳をとるほど新しいことをするのが辛い。やりたかったことではあるが、知識や経験のなさで毎日が必死であり、この仕事が自分に合っているかどうかは分からない。しかし、これが自分の運命である。与えられた道を楽しむしかないと思うようになった。どん

な仕事をして給料をもらう以上はその道のプロとしての専門知識が必要である。「人生一生勉強」と楽天社長の三木谷浩史さんがある著書の中で書いている。深く共感する。そして、その勉強しようと思える原動力となるものの一つが人との出会いだと思う。私の場合、中学生時代の恩師との出会いがこの二年間の原動力である。教員という同じ立場になってからもお話することができた。自分が思う以上の努力をされていた。それを知ること、さらに力が湧いてきた。また別の恩師にも、さらに別の恩師にもお会いし、お話することができた。心配し、応援して下さる方もいた。見守ってくださる人がいる。そう感じることで頑張れた。また、昔の恩師だけでなく、今の職場でも支えて下さる方がいる。また、頑張られている方と一緒に仕事をする中で、自分も頑張れる。どんな道に進もうと、出会う人に支えられ、エネルギーをもらっている。この先、どのような人生になるかは分からないが、人との出会いを大切にしつつ、その時々を楽しみたいと思っている。

(平成10年自然システム学科生命システムコース卒)



高校・特別支援学校部会総会並びに講演会

部会長 田村 公子

本年度の高校・特別支援学校部会総会は、平成25年8月24日（土）、ホテルザ・グランドパレス徳島において、涓水会から佐藤勉会長様、毛利久康副会長様、近藤隆子副会長様、総合科学部から宮崎隆義副学部長様、顧問の皆様方の御出席をいただき、高校・特別支援学校部会会員の皆様方の御参加のもと盛大に開催されました。

平成24年度の会務報告・決算報告の後、平成25年度の役員選出、平成25年度の会務計画・予算案についての審議がありました。会務・決算報告、会務計画・予算案につきましては、事務局提案の案のとおり承認されましたので、御報告させていただきます。

平成25年度の役員につきましては、現職の校長先生方を副会長に、副校長・教頭先生方を監事に、退職された校長先生方を顧問に御就任いただくことにさせていただきました。また、恒例により、今回の総会において、次期会長に国府支援学校の飯田ひとみ校長先生を選出させていただきました。各先生方、どうぞよろしくお願いたします。

本年度の講演会では、徳島大学大学院ソシオアーツアンドサイエンス研究部准教授の中村豊先生を講師にお招きし、「徳島の縄文・弥生時代－青石と雑穀の考古学－」と題して御講演をいただきました。

今回の講演会については、涓水会ホームページに掲載することにより、事前に広報していただきました。

御講演は、徳島地域に特徴的な文物である、「青石製石器」と「雑穀」に着目した内容でした。諸調査で様々な遺跡から発掘された出土品等を映像でお示しいただき視覚的に理解しやすく、郷土徳島の歴史に触れることが出来ました。現在庭石として徳島県内はもとより全国で使用されている青石の利用法の変化や、縄文時代から弥生時代の農耕について等興味深く拝聴しました。

中村先生には、御講演の後の懇親会にも御出席いただき、会員の皆様とも親しく御歓談いただきました。懇親会には御公務の後、駆けつけて下さった平井松午総合科学部長様の御参加もいただきました。

(昭和51年中学校課程家政学教室卒)

総会・講演会・懇親会

日時 平成25年8月24日（土）

場所 ホテル ザ・グランドパレス徳島

講演会 講師： 中村 豊 氏

徳島大学大学院 ソシオアーツ

アンドサイエンス研究部准教授

「徳島の縄文・弥生時代－青石と雑穀の考古学－」

事務局 池田支援学校



講演会の様子（講師：中村 豊 先生）

渭水会幼稚園部会研修報告

加藤 真理子

幼稚園部会は、徳島の阿波踊りの熱気がさめやらぬ平成25年8月16日（金）に鳴門教育大学附属幼稚園の遊戯室をお借りして行いました。渭水会の助成事業を受け、会場設営から接待まで附属幼稚園の先生方のお世話になり、開催することができました。心温まる準備に本当に感謝申し上げます。

幼稚園部会の会員の人数は今や風前の灯火。数少ない会員だけでは研修の機会が設けられず会員がいなくなる時期がくることも考えられますが、幼稚園教育に携わっている教員のためにまた未来を担う子ども達のために役に立てることができればと思っています。

今年度の講師先生は、社会福祉法人 矯風会 徳島児童ホーム園長の山崎健二先生にお願いしました。山崎先生はロゴス腹話術徳島支部長をなさっておられ、「ロゴスとの出会い」という演題でご講演いただきました。参加者は、会員を含めた幼稚園教育にかかわる30名ほどの幼稚園教員で、若い先生から先輩の先生まで和やかにまた賑やかに会が進められました。

以前山崎先生を幼稚園にお招きした時、子ども達が目をきらきらさせて人形に見入ったり、笑い転げたりする姿を見て感動しました。山崎先生の腹話術

には引き込まれるような話術と楽しさがあり、人形が本当に意志をもって話し、生きているように見えてくるのです。

腹話術にはいろいろな流派があって山崎先生は、春風イチロー師匠が始めたロゴス腹話術を勉強されたそうです。春風イチロー師匠は若いころ、春風亭柳橋師匠に弟子入りをして寄席に通い、落語家の道を歩んでいたそうですが、師匠の“春風亭（しゅんぶうてい）”の“春風”をいただいて“春風（はるかぜ）イチロー”という名前でロゴス腹話術を立ち上げられました。後にロゴス腹話術は全国に広がり、“春風”の名前をいただいた先生方が各地にいらっしゃって講習を受けることができます。徳島県支部にも一人春風ターキーさんという方がいて徳島の方は支部長の山崎先生と春風ターキーさんから講習を受けています。実は私も腹話術の虜になって練習中です。今回の研修が子ども達と生活する中で小さな彩りとなってくれることを願っています。

その後の懇親会では、若い先生や先輩の先生も一緒になって情報交換をしたり楽しい話に大笑いをしたりと親睦を深めることができました。

〔 昭和53年幼稚園課程卒
徳島市立国府幼稚園長 〕

徳島市退職校長会は、会員の研修と相互の親睦を図り、併せて本市の教育振興に寄与することを目的として活動しています。主な活動として「総会・新入会員歓迎会」「講演会並びに叙勲・大臣表彰(章)祝賀会」があり、さらに、子どもの支援活動に力を入れております。これは、教育支援部が中心となって「子ども歩き遍路」や「歩く遠足サポート事業」を実施しています。

世界に誇る文化遺産である四国88カ所のお寺を訪ねることで、先人のすばらしい歩みを理解するとともに、それを守り世界に発信できる子どもの育成に寄与し、そこを歩くことで子どもの体力の向上にもなればと考えて実施しています。

さらに、会員の絆を深めるための活動として「いきいきサロン」を実施し、会員相互の親睦を図り情報の交換にも力を入れていきます。

今回、会員の研修と親睦を図るために「講演会・祝賀会」を開催し、今日的な課題について専門家を招いて研修したことについて報告します。

1. 期 日 平成24年12月15日(土)
2. 会 場 ホテルグランドパレス徳島
3. 演 題 どうなるこれからの日本と徳島
4. 講 師 徳島新聞社 編集局
政治部長 喜多條高資氏

5. 講演骨子

(1) 最近の県政施策の特徴

- ① 復興の年における「新たな挑戦」
 - ・「3連続地震」を迎え撃つ態勢を強化する
- ② 「課題解決先進県」で日本再生をリードする
 - ・攻めの姿勢で！徳島の新成長戦略とは
- ③ 「地方の時代」を先導！進化する徳島県
 - ・時代を先取りした組織体制の整備
(関西・四国広域連合)

(2) これからの日本について

- ① 衆院選で自民圧勝か
 - ・民意の振り子
(オセロゲーム、振り子の理論)
 - ・3大争点(消費増税、原発問題、TPP)
 - ・争点操作
 - ・生活保護主義
- ② 夢を持つことの大切さ
- ③ 意識改革の必要性
 - ・まねをやめる
 - ・思考停止をやめる

・人任せをやめる

④ 日本の将来は高齢者と女性が握っている？

(3) 参加者の感想

- 日本や徳島県の今日的課題をわかりやすくユーモアを交えて話して下さって目から鱗が落ちたところもありました。特に心に残ったのは「意識改革の必要性」というところで、「思考停止をやめる」「人任せをやめる」といったことは反省させられました。「日本の将来は高齢者と女性が握っている」とのことなので私もがんばろうと思いました。

(昭和43年小学校課程地理学教室卒)

渭水会ホームページもご覧ください

渭水会では、会員の皆さまにより速やかに情報を発信するため、2012年10月1日より、ホームページを開設しております。本ホームページでは、渭水会の活動についてのお知らせや活動状況のご報告に加え、総合科学部構内や総合科学部が所蔵する文化財の写真などもご覧いただけます。また、活動状況報告の中には、この「渭水会々報」のホームページ版が掲載されており、ダウンロードしていただくこともできます。

会員の皆さまに、学生時代の思い出を振り返っていただけるような、親しみあるページを目指すとともに、母校の最新情報についてもお知らせしていきたいと考えております。是非、渭水会ホームページにお立ち寄りください。

ホームページ URL <http://www.isuikai.jp>

※検索エンジン（google、yahoo等）で、「渭水会」と検索いただいてもご覧いただくことができます。

徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報並びに本学ホームページを御覧ください。また、会員の皆様の御意見や御要望をお寄せください。

徳島大学総務部総務課 (Tel : 088-656-7021 Fax : 088-656-7012)

(E-mail : kohokakaricho@tokushima-u.ac.jp URL : http://www.tokushima-u.ac.jp)

I 学内の状況

1 阿波銀行との連携協力に関する協定を締結

平成25年2月25日、徳島大学は阿波銀行との連携協力に関する協定を締結しました。本協定は、阿波銀行と本学それぞれが保有する研究技術、情報及びノウハウ等を活用して地域の産学連携を推進し、地域の発展と産業の振興に寄与することを目的として締結されました。

協定書調印式では、阿波銀行の岡田取締役頭取と香川学長との間で調印が行われ、相互の協力と支援を約束し、握手が交わされました。今後は、1) 地域の経済活性化に関する情報交換及び支援、2) 徳島大学の研究成果等に関する情報交換及び支援、3) 地域企業の研究開発ニーズ等の紹介支援、4) 徳島大学発ベンチャー企業に関する情報交換及び支援を活発に行い、地域貢献の幅を更に広げて行くことが期待されます。

2 大学開放実践センター公開講座「生涯学習研究院」開講式を開催

平成25年5月1日、大学開放実践センターにて、平成25年度大学開放実践センター公開講座「生涯学習研究院」開講式を行いました。

生涯学習研究院は、地域が抱える問題の解決に取り組むリーダーを育成することを目的に、社会人の方を対象に行われる学習プログラムです。生涯学習研究院には「青少年健全育成」「健康・フィットネス」「災害対策とICT」「国際協力」の4つの領域が設けられ、受講生はそれぞれの領域で公開講座と大学の授業を組み合わせる2年間学び、修了者には審査を経た後に市民活動支援士の称号が授与されます。

本プログラムは、地域のリーダー育成を目的としますが、同時に、学部学生の授業に年齢や経験の違いを受講生が加わることで、本学の学部教育の活性化にもつながることが期待されます。

3 2013年度五月祭を開催

平成25年5月25日と26日の2日間、常三島キャンパスにて、2013年度五月祭を開催しました。五月祭は、この春に徳島大学に入学した新入生を歓迎し、交流を図ることを目的に開催されています。2013年度五月祭のテーマは「MAY いっぱいの青春」で、5月(MAY)に開催される祭りを通じて、「目一杯」

大学生生活を楽しめるように、という意味がこめられています。

5月25日は、朝からステージ企画、教室企画が始まり、多くの模擬店も出店しました。ステージ企画では、ユニークなバンド演奏や華やかなダンスパフォーマンスなどに歓声があがりました。

模擬店を出店した学生たちは、慣れない手つきでたこ焼きやフライドポテト作りに奮闘しながら、仲間と協力する楽しさを味わった様子でした。

JR 桑野駅から徳島大学への30kmの道のりを歩く貫歩企画は、5月25日から26日にかけて行われ、約180名の参加者は友人と励まし合い、助け合いながら、無事に歩ききりました。

II 学生関係

1 卒業式・修了式

平成25年3月22日、アスティとくしまで平成24年度卒業式・修了式を挙行し、合計1,764名(学部卒業生1,231名、大学院修士(博士前期)課程469名、大学院博士(博士後期)課程64名)の卒業生及び修了生に、香川学長から学位記が授与されました。

香川学長からは「倫理観、道徳観に裏打ちされた徳島大学卒業生として、ご活躍されることを期待します」との激励の言葉がありました。卒業生・修了生総代として、医学部の内田貴之さんからは「長期的な展望を持ち、努力を惜しまず、徳島大学卒業生・修了生としてその名に恥じぬ人間を目指していきま」と答辞がありました。

2 入学式

平成25年4月5日、アスティとくしまで平成25年度入学式を挙行し、合計1,941名(学部1,323名、大学院修士(博士前期)課程476名、大学院博士(博士後期)課程101名、3年次編入学41名)の入学が許可されました。

入学式では、入学生を代表し、総合科学部総合理数学科の杉本千晶さんから「本学の教育方針に従って学則をまもり、学術の研究と人格の陶冶に努めることを誓います」と宣誓がありました。その後、香川学長からは「ゆっくり腰を据え、自分のキャリアデザインを描きながら、有意義な大学生生活を送られることを願います」とのお祝いの言葉がありました。

総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は、徳島大学総合科学部総務係にお尋ねください。

徳島大学総合科学部総務係 TEL：088-656-7103 FAX：088-656-7298

E-mail：sksoumk@tokushima-u.ac.jp

■2号館の改修

「音楽棟」・「美術棟」の愛称で親しまれてきた総合科学部2号館は、平成25年3月に耐震改修工事が終了し、新たに「地域連携プラザ」に生まれ変わりました。旧音楽棟のホールも「地域連携小ホール」に衣替えされました。来年（平成26年）3月には、旧音楽棟と美術棟の間に建設が進んでいる「地域連携大ホール（仮称）」が完成します。



2号館地域連携小ホール

■外部評価委員会の開催

3月18日（月）に徳島大学総合科学部・大学院総合科学教育部についての外部評価委員会が開催され、平成21年度の改組ならびにその後の取組については、多くの評価項目で「十分に達成できている」あるいは「概ね達成できている」と評価されました。『外部評価報告書』も刊行されました。

■福島支援活動報告会の開催

本学部の中山信太郎教授（放射線学）が中心となって進めている徳島大学福島支援活動の報告会が、平成24年3月24日（土）に徳島県郷土文化会館（あわぎんホール）大会議室で開催されました。平成24年度の活動事業報告書も刊行されました。



福島報告会

■人材育成事業報告書の刊行

3月に、徳島大学総合科学部も参加している平成24年度の『産業界等との連携による中国・四国地域人材育成事業 年次報告書』が刊行されました。

■名誉教授の就任

平成25年3月31日付で退職された次の先生方が徳島大学名誉教授とされました。いずれも長きにわたって総合科学部などで教育研究活動に携わっていただきました。篤く御礼申し上げます。（ ）内は徳島大学での在職年数。

片岡啓一 先生（35年9ヶ月）

仙波光明 先生（35年）

中村久子 先生（34年9ヶ月）

濱田治良 先生（31年）

森岡芳洋 先生（37年）

吉田昌市 先生（35年）

■学部新執行部体制の紹介

平成25年度より、評議員の小山晋之教授に加え、副学部長として（主に研究・大学院担当）宮崎隆義教授、（主に教育担当）松尾義則教授、（主に社会貢献・GP担当）玉 真之介教授の3名に学部執行部に加わっていただきました。

■教職員の異動

4月1日付で、次の先生方が教授に昇任されました。

堤 和博 先生（日本古典学）、ヘルベルト・ウォルフガング先生（比較文化研究）、三浦 哉 先生（応用生理学）

同じく4月1日付で、次の先生が准教授に昇任されました。

福田スティーブ利久 先生

事務職員には次の方々が着任されました。

川野真一 氏（総務係長）、金子由起 氏（総務係主任）、田辺満香 氏（学務係主任）

■新任教員の着任

平成25年4月以降、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

〔4月1日着任〕田久保 浩 教授（英米文化研究）、村上敬一 准教授（地域言語論）、田中 桂 准教授（フランス文化論）、山口鉄生 准教授（健康教育論）、川上竜巳講師（環境資源利用学）

〔4月15日着任〕熊坂元大 准教授（応用倫理学）

〔5月1日着任〕塚本章宏 准教授（空間情報論）、原田 新 特任助教（臨床心理学）

〔7月1日着任〕佐藤 裕 准教授(認知心理学)
〔8月1日着任〕大村 聡 助教(化学)
〔10月1日着任〕新田元規 准教授(アジア思想)

■学生表彰

学業成績が優秀な学生を対象に、4月19日(金)に学生表彰式が開催されました。受賞者は次の方々です。

〔人間文化学科〕谷先直子、小西沙季、上原郁美、
原口侑大、西岡佑子
〔社会創生学科〕濱野佳菜、高木美和、都築弘充、
山岡菜由子、岩崎晃司
〔総合理数学科〕山田梨加、立田彩和、木村優斗

■表敬訪問

5月1日に、インドネシアのハン・トゥア・スラバヤ大学の副学長 Dc. Mas Roro Lillik Ekomanti 教授が総合科学部を表敬訪問されました。

■大学院入試説明会の開催

5月10日(金)に、大学院総合科学教育部の入試説明会を開催しました。参加者47名。

■地域系大学・学部連携協議会に参加

岐阜大学主催により、6月27日(木)に平成25年度地域系大学・学部連携協議会、翌28日(金)にシンポジウム「地域連携と教育の可能性と課題：広がりを求める、繋がりを考える」がホテルグランヴェール岐山で開催され、総合科学部からは平井学部長ほか4名が参加しました。

■優秀教員の表彰

7月4日(木)に、平成25年度総合科学優秀賞受賞者への授賞式を行いました。表彰者は次の方々です。

小山保夫教授【重点研究分野：環境共生のための地域科学研究】分野

境 泉洋准教授【重点研究分野：地域の健康づくり】分野



総合科学優秀賞受賞者への授賞式

■オープンキャンパスの開催

8月7日(水)に総合科学部のオープンキャンパスが開催されました。参加者数(延べ数)は高校生680名、保護者178名。



オープンキャンパス

■総合科学部振興会総会ならびに保護者懇談会の開催

8月8日(木)に、在学生の保護者会である総合科学部振興会の総会ならびに保護者懇談会が開催されました。参加者は32名。



保護者懇談会



編集後記

渾水会々報第42号をお届けします。ご寄稿くださいました皆様には厚く御礼申し上げます。今号の表紙は特集「芸術の秋」から梶田 務先生の作品で飾りました。またその裏面には来春に竣工予定の地域に開かれた施設のイメージ写真を掲載しました。次に新たに選出された平井松午学部長に就任のご挨拶をいただきました。次いで永年にわたりサンショウウオを観察し、新種のシコクハコネサンショウウオを発見された田村 毅先生の Topics を掲載しました。また恒例の「総合科学部では今」では今井昭二

教授の梶ヶ森でのPM2.5の現状を美しい写真を多用して、今までとは少し趣きの異なるコラムを執筆していただきました。特集「芸術の秋」では彫刻の作品、美術の作品、そして音楽にまつわる原稿を二つご寄稿いただきました。連載のLet's sportsと感動が人間を育てるでは、杉本康博君に徳島ヴォルティス、そして石川榮作前学部長に映画「寅次郎夕焼け小焼け」をそれぞれご寄稿いただきました。また「総合科学優秀賞」を受賞されたお二方の先生にもご寄稿いただきました。そして恒例の「スタートライン」と「エッセイ」を掲載いたしました。広報係では会員の皆様からの色々な内容のご寄稿をお待ちしています。